

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動



人上木鈴と人上多本・春年五十治明

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ウテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ密所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス



篤敬三寶則四生之終歸者國
之極宗也。何也。何人。不考。是法
人鮮。尤惡能教。後之其不歸。

三寶以何互在

謹錄憲法之條章

大僧會生



我所感の一節

本 多 日 生

統一と混同とは、文字の表示する所、既に明白なる殊別を存す、而して之を主義とし、之を實行するに至りては、其差異殆んど天淵の如く、全く大反對の現象を生ずべし。此を以て統一主義を把持する者と、混同主義を主張する者とは、氷炭相容れざる固より其所なりとす。但怪む現時佛教各宗の把持し、主張する所、佛教統一の名を以て主義と稱するにも拘らず、其實際の所論所見を檢するに、畢竟各宗殊別の教義に向て何等の標準をも定めずして、漫りに混同的の連合を策するに過ぎず、實に彼等は統一の正義なるを認めたるも、自家の宗義を確信せざるが故に、其實際に至りては混同の拙策に陥りたる者と謂ふべし。是れ其統一主義に於て、深き根底を有し、確かなる標準を示し、正しき主義を立つるの教基を有せざるの致す所なり。

凡そ統一の正義なるを認めたらんには、勇奮一番進で統一の標準を確立し、而して其主義を明示せざるべからず。今各宗の舉措を案ずるに、一面には混同を説き、一面には各立を策す、首鼠兩端に走せて、其宗是の指針一定せざるもの、如し、夫れ斯の如き朦朧たる主義を以て、確固不拔の安心を生命となせる宗門の合同を行はんとす。抑も謂はざるの甚しきもの、予をして雜駁にいはしめば、各宗の學者高僧は全く佛教統一の標準を知らざる愚迷の徒にして、一宗一派の執見に屈し、未だ佛教を包羅して群生を普濟する底の大精神だに有せざるものたるを疑はざるなり。

各地の巡教に當り、各宗の徒が、我統一軍の陣前に向ひて反抗を試むるものは一齊に左の辭柄を弄するに過ぎず。曰く、『内地雜居、外教の侵入に、我佛教各宗は合同の方針を採りて提携し、之に對向せざるべからず。由來佛教は應病與藥の施設に出づ、各宗の依經皆是れ正法なり、其機の求むる所に任せ偏廢すべからず。然るに四箇格言の如き銳利なる論鋒を用ひ、各宗の教義を摧破せんとす、是れ全く佛教の設化を領せず、時勢の傾向を察せざるの暗者なり』と。斯かる意見は殆

ど一般僧侶の間には認せられ居るもの、如し、而して未だ一人の某宗の教義は、佛教を包羅して以て剖判を下し、萬機を攝して以て普治の益を與ふる完全圓具の宗門たり、若し各宗統一の義を立んと欲せば、宜しく統一の教基を某宗に求めて其標準となすべしと云ふが如き抱負あり、確信あり、赤誠あり、決意ある陳辯を聞くを得ざりき。

此に於て乎、我所感勃々禁ずる能はざるに至れり。予、曾て夢想兵衛と題する稗史を見るに、謂るあり、『人間の性情虚偽を好むの一僻あり、彼の一夜の快を娼婦に貪る者、彼女が心情誠意なきを知るも、若し一語の我に戀着を説かざらんか、忽ち不平勃發し、遂に杯盤を蹴り鐵拳を振り、天上の樂園は修羅の闘場に化す。之に反して娼婦戀々痴情を吐き、喃喃之を慕ふの語を放てば、彼女の言ふ所虚偽たるを知るも、其一時の痴言を愛して歡笑頷を解くに至る、是れ全く人性に虚偽を愛するの一僻ある故なり』と、此語能く人性の弱點を穿てり。此種の僻性は劣等なる痴情に於て之あるを恠まずと雖も、宗教の信仰に於て、此種の僻性を助長し、虚偽を好むの風を馴致するに至りては、教法の勝利を没却するは言ふまでもな

く、遂に國運の頽廢を來たすの素地を造るに至らん。國民の多數虚偽を好むに至りて、其國衰を免るものはあらず。今や國家各般の事、虚偽相積み、國家の進運を沮害する極めて多し。

此時に當り教家も亦此趨勢を挽回するの力なく、却て之に倣ふが如きことあらんか、遂に國を擧げて虚偽を好むの民たらん、是れ豈に國家の慶事ならんや。各宗の徒試に靜思せよ。

法然、親鸞の教説たる、佛教は對機施設の法門萬古なるも、末法の時に於て濁惡の機に對して利益を與ふべきもの、唯彌陀念佛の一行のみ、餘は咸く今日の時、今日の機に適當せざるが故に、之を結束して聖道の諸經諸宗は千中無一の戯行たりと決論したるものにあらずや。然るに其法流に在る者、一時世人の歡心を買はんが爲めに、應病與藥あり、諸宗併立固より喜ぶべしと云ふが如きは、是れ全く上宗師に反し、下國民を欺く虚偽の陳辯にあらずや。

又弘法、覺鑊の主張たる、釋迦一代の諸經を捲きて劣條となし、別に大日所説の勝法ありと稱し、以て一代佛教を包羅するのみならず、其の上に眞言門を建立し、

依て以て顯教諸宗の争鬭の如き是非共に非なりと論斷し、秩然として佛教統一の指針を定立せりと思へる者、若し其末流に在る者、此抱負なく、勇氣なく、確信なくして各宗各立の是を説き、自家の教義を無視し、阿世の愚を學ぶに至らば、是れ亦虚偽の解説を弄するの伍にあらずや。

吾曹は悲む、各宗比々皆漫然混同各立の策を賛して、一人の銳意統一の標準を求むるなきを。嗚呼識見の陋劣一に何ぞ此に至れるや。縱し其教基は淺弱なるにせよ、其標準は偏局なるにもせよ、其義は薄弱なるにせよ、何ぞ進て我宗の教義を以て佛教統一の標準とし、指針となすべしと云へる勇氣ある主張をなさざるや。若し自ら自家の教義を以て統一の標準と定むるの確信なくんば、何ぞ過かに聖日蓮の統一論を鑽仰稟承せざるや。彼等は進退去就の途だに知らざるものと謂ふも決して過言あらず。

吾曹は望む、各宗の徒が、吾統一團の標準主義に向つて、其當否を正明に研磨するに至らんことを。(以下略)

(以上は明治三十年晚秋、古郷白鷺城東に於て、日生上人の手記されたものである)

統一團の使命行事

笹川日堂

一、統一團の縁起

統一團創立に四十年、其の機關誌統一團を重ぬる五百號、誠に爲道祝福すべき慶事である。

回顧すれば明治二十九年、佛教各宗協會は顯本法華宗の綱要中にある、四箇格言の一章を偏狹にも無法にも、專擅に除去したに端を發し、本宗に於ては本多日生師障頭に立ち、猛然として其の非行を糾弾し、併て各宗教の邪說誤謬を剔抉し、教界の内外を風靡驚嘆せしめた、所謂格言問題に起因して統一團は創立せられた。其の趣意目的は妙宗内部の結合を鞏固にし、宗祖日蓮大聖人出世の使命行事を體現

し、立正安國の志願を果たすに在ることは、同年十二月十三日開催の統一團宣言式發表に依て明かである。

一、四箇格言に就て

四箇格言は佛教教義の歸趣を闡明するために、日蓮聖人が釋尊を大恩教主久遠實成の本佛と仰ぎ、純圓一實壽量顯本の妙旨を説く法華經を根本義と信じ所謂立正安國の實現には、「國中の謗法を攻めて釋尊の化儀を扶け奉るべきものなり」との、堅確なる信念の下に各宗の邪義誤謬を評破せられた教判である。各宗の宗祖人師の中に佛教の大綱と綱目を混

亂して、自義を主張した人も往々ある。愚人は直言を諷刺とする、四箇格言は強義にして壓力の烈しいために、世間の人は排他の惡口攻撃と盲斷し、各宗の者は重壓に辟易の體で、陋劣なる奸策や當路の權力に絶りて、彈壓を加へる苦肉の計に出た者も多い、日蓮大聖人の在世大難を忍受し數々死生の間を往來したる、各宗僧俗の讒誣傲訴と北條一門の暴壓によるものである。聖人の在世已に殉教の血史あり、滅後於て、正法弘布邪教退治を叫ぶ者皆然り、日蓮上人の頭に熱湯を注がれたる、鎗冠日親の足利義教に受けたる迫害の如き、常樂院日經の徳川家康に受けたる極刑の如き、何れも殉難の因由が首肯される。

殊に徳川幕府に到りては日蓮主義正當の主張を彈壓する爲に、公命に背くの漠然たる辭柄を以て流刑に處した。又自宗の側でも權力に怖れ或は權力に阿附し、自己擁護のために公訴に出た。今日の時代に

於ても四箇格言の稱道は、時代錯誤であると鼻であしろふ人もあるが、教化の大本と時代對應の宣教を輕視して、自己の修養を忘れ猥に四箇格言を誇張するは有害無益で何等教風の振興にならない。併しなから現代の如く比較宗教の必要を辨へず、混同的に盲信するの弊は、妖教淫祠の蠱毒に犯され擠ふべからざることになる。要するに四箇格言は正法廣布邪教對治の要劑で、此土寂光寶土の實現に外ない。

一、統一團の行事と先人の遺勲

統一團創立已來四十年の徑路に變遷消長あるも、教化第一主義に則り、其の目的所信に向つて邁進した。而して是等精神的又協同的專業の達成には、自他彼此の心なく水魚の思ひをなしての、信念徳操がなければならぬ、異體同心なれば萬事を成じ、同體異心なれば諸事契ふこと難しの祖訓を、平時には壯語するが、イザ實行となると卑怯臆病で逡巡する

人が多い、その理由は我慢偏執名聞利養の感情や虚榮に囚れ、無道念無節操のためである。日蓮門下統合の難さも推して知るべきである。本多上人は此の消息を取られ、協同的事業には懇懇に己を虚ふして能く衆議を容れて調節せられた。その一例を挙げれば、明治三十五年の開宗六百五十年には統合の促進を提唱し、明治四十一年には天晴會を組織して日蓮門下の僧俗を糾合して、日蓮主義と國運の興隆を期し、大正二年には統一團會堂を建設して時代適應の對策を樹立し、大正四年には日蓮門下七教團統合規約成立の大事を遂げて、妙宗内部の結合を鞏固にするの初一念を貫き、大正十一年には立正大師勅諭宣下の 聖恩を拜受し奉る。此の光榮は門下九教團一同の拜戴する所で、又九教團和衷協同の華果である。これ皆顯本の管長として又統一團總裁たる本多日生上人に負ふ所願る多いと想ふ。

一、先覺者本多上人傳統の源泉

正法弘通邪教對治は、法華色讀日蓮聖人殉教當身の教風である。本多上人の公正なる識見と行動は日蓮聖人に歸し奉る、顯本開祖日什上人の眞意を繼承せられ、如來の使命行事を果たすに一生を捧げられたのである。追憶するに大正十五年五月十八日總本山妙滿寺の御寶前に於て、管長退職最後の教訓として經卷相承の宗脈の大事な所以と、これを確保すべきを述べられた。日蓮聖人滅後百年門下の動向は唯形骸を株守して何等進展の計策なく、化儀法理紊れ教風廢頽して、萎靡消沈の状態である。此の秋に方り天台の學匠で聲譽の地位にある玄妙能化が一度日蓮聖人の開目抄如說修行抄を拜讀して、多年の疑網一時に氷解し、感激涕仰直に改宗して名を日什と改め、天奏三回室町將軍鎌倉管領等に數度の諫訴をせられて、祖道光顯に奉行せられた、日蓮

記に云く。

日什上人 仰に云く、大聖人直弟の御代より互に是非評論ありと聞ゆ、誠に上代よりこれあるか、又中古末代より各々非義をいひ振舞出して、事を上に代に譲られけるか、何んと尋ねども人々正直に答ふる人あり難しと覺へたり、所詮大聖人の直弟の御事は、是非共に實證を知りがたし故に是非の沙汰申し難し、但し末學達の化儀に付け片違ひなる事の誤り多々なる間、左様の諸門跡には同心申さずして、但仰て大聖人御内證より垂れ給ふらん御慈悲を信用して、高祖の御心中より直に法水を酌み奉る。さて我が散分の及ぶ程随方弘通を勵まして高祖の化儀を助け申さば、定めて大聖人の直弟の御影達も、正直に渡らせ給はんほどの内證には悦ばれ參らせこそせられむ。嘗て上代の直弟をば實證を知らずして是非申し難し、さて果すべきにあらざれば、中絶の法水を大聖人の御内證より續

き奉るべし、是則ち經卷相承の一分なり。

斯の如く日什上人の公明なる主張は即ち教風の振興を意味するもので、形式に囚はる信仰に對して受持の絶たるを指摘せられて、如說修行受持信念の實證の肝要を教訓されてをる。世には師資の相承を血脈相承とするが、是は淺薄なる考へで血の通はな いでは何事も成就せない、信心の血脈なくば法華經を持つとも無益なりとの聖訓に照らしても、理由のないことが判明する。經卷相承こそ血脈相承である、日蓮聖人の本化上行菩薩の自覺は、則ち經卷相承血脈相承の實證である。今にして尙聖祖門下に於て付弟を云爲するは、教風を廢頽さすの外ない愚である、日什の門弟には付弟嫡弟あるべからず、京都の弘通を勵み諸宗の邪義を攻め、法華成佛を堅く申す人を日什の門弟等師匠と仰げと、互に主伴となり化導に従事することを訓へ、例令日什の主張なりとも高祖の御書、天台傳教大師本意の釋に違

ふものは用ゆべからずと戒飾し、何れの御門徒たりとも高祖の御書に改悔ありて弘通あらば、隨身いたせと遺訓せられた日什上人の公正なる襟度に、我等法益は感孚して畜盜法師の汚名を受けないよう、濟世利民の佛事を成辨せなければならぬ、本多日生上人は我等の先蹤者である。

統一團創立四十年、雜誌『統一』五百號、祝賀の微意を表するため、日蓮主義興隆の恩師本多上人の遺勳を思ひ奉る。



一門中心得可キ事
 大聖ノ御門第六門跡、並ニ天目等ノ門流ハ、皆方軌佛法共ニ 大聖ノ化儀ニ背ク處有ルニ依リ同心セザル也。直ニ日什ハ仰デ 日蓮大聖人ニ歸ス處ナリ、門弟等深ク此旨ヲ存知ス可キ者ナリ。但シ下總眞間ニ於テ歸伏ノ狀並ニ起請文有リ、然リト雖モ法門並ニ方軌 大聖ノ御儀ニ違フニ依テ捨テ申ス所ノ者也。是レ捨惡知識ノ質也。

右日什ノ門弟等此旨ヲ尋ヨ。此旨ニ違背ノ輩ニ於テハ謗法墮獄ノ罪過タル可シ。仍テ後日ノ爲メ置文狀件ノ如シ。

嘉慶二年 戊辰 八月廿五日

二位僧都 日 什 花押

祝「統一」五百號發刊

山 根 青 村

逐號重來五百篇 玄論妙說動山川
 閻浮統一想無限 鏡益蒼生億萬千

次青村詞宗瑤韻祝「統一」五百號

成 島 龍 北

聖師滅後意凄然 誰掛教光照四天
 獨有堂々統一筆 重來五百誇其妍

「統一」誌の第五百號發刊を祝し、故本多上人の偉績を憶ふ。

柴田一能

「統一」誌は、事新らしく申すまでもなく、今日では財團法人となつてゐる統一團の機關誌として發行せられたもので、其任務は統一團の目的を遂行し實現するため宣傳乃至報道を司るものであつて、團の目的は……

「日蓮教學の心髓を講明して、佛祖正脈の法統を擁護し、我國精神文化の精髓を發揮して、國民精神の根柢を培養し、立正安國の大義を宣揚して以て理想の文明を建設すべく、街頭布教並に教化講演會を開催し、又月刊雜誌「統一」を發行す」

とあるのに基いて發行せられたもので、創刊已來第五百號の現在に至るまでの四十年間に、どれ程日蓮教學の心髓を講明し、我國精神文化の精髓を發揮し

らうものゝ國際的地位——名譽の孤立とも謂ふべき八方塞りの状態といひ、目下進行中にある川越大使蔣介石の外交交渉は如何に日支の關係を規定するであらうか。

統一團の中心事業として……

第一、佛祖正脈の法統を擁護する事。

第二、我國精神文化の精髓を發揮する事。

第三、之に適當する學風を振起する事。

第四、時代對應の教化を實行する事。

第五、門下並に我國文教上統一の學風教化を守事の五大項目を掲げ、之を遂行實現せしむべく機關誌

「統一」は、茲に四十年の春風秋雨を凌いで來たのであるが、偕て實際上の成果と當初の理想とを兩々比して見ると、思はず長大息を漏らさざるを得ないのである。

し退いて考へて見ると、由來興學布教の事業程効果の目立たないものは尠いので、特に精神文化と逆行するかのやうな物質文化の發展に對しては、斷

て、法華の正統を擁護し、國民精神の根本を培養したであらうか。翻つて現代の世相を眺めて見ると本尊問題にしても、戒壇論にしても、學者の主張が區々に分かれて歸趨する所が明瞭しない。我日本文化の精髓を發揮して、大いに國民精神の根柢を培つた筈であると思つてゐるのに、最近起つた五・一五事件や、二・二六事件は何事であるか。眞實平和の上に理想の文明を建設すべく、街頭布教や、教化講演に懸命の努力を拂つた筈であるのに、伊エ戦争や、スペインの内亂——而も反軍の後は獨伊が腰を推し、政府軍の背後には佛露が控えてゐると傳へられるのは何たる事であるか。況んや眞實平和の擁護者、樹立者を以て自から任ずる大日本帝國ともあ

へず押され氣味であつて、教化の實を擧げて行くことは一層の困難を覚えるのである。従つて四十年一日の如く、血みごころの惡闘と苦戦を續けて來た我が「統一」が、假令その理想とする統一を實現すべく前途尙ほ遠遠なりとしても具體的事功や、數字的の統計は擧げられずとしても、約半世紀に近い長年月間、一回の休刊もなく發行を續けて來たといふ、何人も争ふことの出来ない儼然たる事實その事のみでも、統一の目的理想の一部を實現したものと謂ふべきであると信ずる。況んや本誌を通して自から連絡せられつゝあつた天晴會、地明會、講妙會、自慶會、知法思國會等の活動を始めて、大藏經要義法華經講義、日蓮主義精要、聖語錄乃至パンフレツト、リーフレツト等の讀者に及ぼした大小淺深の感化等に想ひ到る時、四十年間殊に本多上人滅後奮然其衝に當られつゝある磯部主幹の法功の偉大であることを讃仰すると共に、其師聖應院日生上人の道風徳光の更に偉大であつたことを禮讃せずにはゐられない。

動きの難有味

三 上 義 徹

日月の運行は日々同じことを繰り返して居るやうでも、その間に、春咲いた花は秋に實を結ぶのである。寄せては返す波には變りがないやうでも、その水は常に新しい動きを示して居る。すべて、物は靜的狀態に見えても間斷なく動いて居るのであつて、動かなければ死滅であり進歩がないのである。社會面にはあらはれた政治や經濟や科學の活潑なる動きには驚嘆するものが多い、併し宗教部面の動きは、凡人の眼には映らないほど遅々として進まないやうであるが、それほど停滞状態にあつて廢頓して居るのではない。歴史ある宗教の無力を攻めて新興宗教などと呼んで居るものも居るが、それ等は巧みに時代

の潮流に航して動いて居るのに過ぎない、不變の法則による正動ではなく所謂亂動と云ふのではなからうかとおもふ。また宗教界には人物が拂底だと言つて宗教の眞價を念はざるものもあるが、優れた大人物は矢鱈に現はれるものではない。大人物は時を察して現はれて來るものであつて、一たび大人物の動きがある時、その波長は遠く將來に延びて消え失せない、その波線をうけて動く凡庸の力が中々に功果的であるのである。

線延長のほどを測られざる無限さであつた。即ち辯論に於ては日本第一の優越的大廣長舌であり、その熱論は聽者を魅了して信服せすんば已まざるの偉大なる神通力そのものであつた。しかるに今は化を他界に遷してその警咳に接することは出来ないが、その著書數十種の存するありて卓越せる高教を味識し、純正日蓮主義の信念の生氣を把住し保持し得るのである。ことに文書教化の機關として公刊された統一が、幾多の變遷はあつたけれども、茲に滿四十年を迎ふると云ふことは、わが宗教界に在りては一大奇蹟とも云ふほどである。それは佛敎界に四十年の歴史を有する月刊雑誌は大道叢誌位のものであるからである。

近代の聖傑日生僧正は、全佛敎革新の大旗を高揚して、顯本敎風の擴大強化に努力健闘されたのであるが、それは實に勇猛不斷の大なる動きであつて、波

る。たゞその波長の全體が何れの程度の長さであつたかは、いまこれを證することは六ヶ敷いが、一定の力をもつて文書宣傳の機關として動いて居たことは事實である。

爾來、同信の人々によつて日生僧正の動きを繼承し、つねに社會淨化の第一線に奮闘されて滿四十年の永い歲月を迎へたのであるが、時代の潮流は波瀾萬丈であり、人心は濁濁の中に惱んで居る。是に指針を與へ之を救ひ上げるのが統一誌本來の使命であるが故に、更に新たに一段の動きによりてその達成に努力せらるゝ事であると信する、私はこゝに日生僧正の動きの一面であつた統一誌が、今現に動いて將來に生きて行くことを念ひ新たに難有味を覺ゆるのである。

私は今より二十餘年前に四五年の間、萬事を引受けてこの雑誌を發行した事があるが、教材の採集に乏しい經濟の運用に痛手を覺えたことがある、けれども統一の使命實現のために動いて居たのであ

Copyrighted material

統一第五百號記念に際して

山田 繁

今月は「統一」の五百號記念號を出すから何か書く様にと磯部さんからの御命令があつた。来る年も来る年も編輯に校正に一人黙々として寝食を忘れて居らるゝかに見える磯部さんからのお話では、どうも謹んでお請をする外はないと思つて、お言葉のまよに御辞退も申上げ兼ねたのであるが、さて差し加つた家の修繕が思つたより大きくなつて、落ついて居る處もなくなつた儘に時日が切迫してお約束の日も過ぎた。

五百號と云へば創刊以來四十一年餘りの歲月が流れて居る。その間には幾多の波瀾があつたであらう。経済的にもどれ程困難せられたか知れない。宗

教雜誌でなくても、これ程長く繼續された雜誌は稀らしいであらう。「受くるは易く持つは難し」とは大聖人もしばしば仰せられた處である。今本誌が正法弘道の誓願に終始すること四十餘年にして五百號に達したと云ふ事は、創刊者たる本多上人を初め幾多の人々の佛を懐ひ法を思ふ尊い信の一念一念が忍士幾多の風波を凌いで積み重ねられたる護法の結晶である。

「統一」の中には今も本多上人はまぎ／＼と生きて無礙の説法を續けて居られる。上人の法統愛護の御精神を思へば實に涙ぐましい感激を受けずには居られない。上人は私の入信第一の縁となつて下さる。人の道を受するお心の深さは計り知れないものがある。

濟まない、勉強しなくては、いつでもお手紙を拜見する度にさう思ひながら、懈怠に落ちて空しく日を暮して了ふことを思へば實に申譯ない限りである。恩師のお慈悲に答へるだけでも早くどうにかならなければならぬと、それは親しく御教を受けたものの、誰れもが感ずる處であらう。

あれ丈けの大きなお力で教を背負ふて立つて居られた上人の滅後「統一」がどうなるかは實に之を思ふ人の總べての懸念であつたことと思ふ。若し磯部さんがなかつたら懸念どころではなくて大きな危惧であつたであらう。然し磯部さんは實に此時大決心を以て身を「統一」の上に打ち掩ふて其生命を繼がれた様である。而かも本多上人の未だ世に發表せらるゝ運に至らなかつた速記録を整へて、次から次へと掲載せられるので、統一誌上では上人は今だに生

つた大恩人である。あのお忙がしい中から私の貧しい道念の双葉を愛撫誘導して下さつた上人の御恩は實に海よりも深く山よりも高い。時々少ばかりの信解を得て告白すると、さも珠玉でも得た様に喜んで下さつて、歩きはじめの幼児の一步一步を母親があふぎ立て、勇め囁ます様に力づけ喜ばせ勇ましめ、實に懇切丁寧を極めて下さつたものである。幼稚な領解を書き誌してお眼に懸けた時などは、あの文字通り席暖まるに暇なき御中からすぐ採り上げて町寧に一字一句の未迄も熟讀して下さつて、その大きにお目に懸る遠からの機會も待たず早速長いお手紙を認められて、彼處は何の經を参考とせよ、何の問題は何々を讀んで見よなどと町寧に其頁數まで書き入れて下さり、言葉の足らぬ處には實に御親切な朱を加へて早速お使で送り歸して下さつた。實に御懇切とも何とも云ひ様のない御指導の勿體なさは、お別れしての今、尙更涙なしには考へられない。實に上

さて法を説いて居て下さるのである。

磯部さんは實によく恩師に仕へて下さつた、私共がしなければならぬ御給仕を先生は身一つに負ふて勤めて下さつた。御生前に盡して下さつた師孝の真心は益々哀切を加へて、其御位牌に仕へ其御遺志に仕へて下さるのである。磯部さんが本師釋尊に仕へ、祖師日蓮大聖人に仕へ、恩師本多上人に仕ふる其師孝の御志こそは、本多上人滅後十年統一を支へ來つた生命である。國城妻子をも捧げ盡して全く宗教を生活せられた昔の人の面影を其儘にあの謙虚無私なる磯部さんのお姿、法華經の故に一切の人に仕へて倦まざる磯部さんのお姿は、我々の懈怠謗法に對する何と力強き折伏であることぞ。

「統一」第五百號は實に斯の如き恩師とお弟子とのつながりを中心として咲き出でた受苦忍難の麗しい華である。佛は如何に歡喜して此華の供養を受け給ふ事であらう。私は涙ぐましく至心に合掌して其光景に隨喜する外はない。

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし。

—法華經不輕品—

大 八 木 義 雄

日生上人遺愛の機關雜誌統一こたび五百號に達したるを喜びて

このふみを、沙羅の林と、みをしへを、まもる人垣、いやかためなむ

常樂寺に御分骨の日生上人の御墓に生垣を寄進して

たてまつる、この生垣を、身にかへて、奥津城守る、こちこそすれ

佛 人皆の、馴るれば説けと、かひなしと、身かくれて、世をすくふみ佛

日 蓮 上 人 いまの世に、又しのふかな、日の本の、柱になると、立ちしひしりを

道 耳に聞き、目に見なからも、いく千年、おこなひかたき、人の道かな

折にふれて

語るへき、昔を持たぬ、身を取ちて、たた目のまへの、事にいそしむ

背に在りて、泣く子に花を、摘みてやる、をどめ心の、美しくきかな

統一誌の使命

礮部満叟

はしがき

その昔、本誌がどういふ因縁で生れたかに就て、其の當初から關係されて居る方々は無論御周知の次第であるが、何しろ四十年といふ長年月を經過して居ることでもあり、旁これを簡單に御紹介することは、今後本誌の使命を遂行する上に極めて必要なことと思ふ。

多くの事業が、年處を経るに随つて當初の目標から随分かけ離れた方向に脱線して居ることも、世間には往々見受ける所であるが、吾人は其の枝葉の點は時代對應を必要とするけれ共、其の根幹は飽迄素願に準據して行きたい。

そこで統一誌のことを云ふには、勢ひその母體たる統一團の事に觸れねばならぬから、左に之を略記しやう。

統一團創立と其目的方法

明治二十三年、佛教各宗管長は佛教興隆の爲にといふことから、諸宗の宗義を集めて各宗綱要なるも

のを編製せんとして、各宗協會長たる眞宗大谷光尊師は、眞宗の島地默雷師、天台宗の蘆津實全師、臨濟の進藤端堂師、釋宗演師、眞言宗の土宜法龍師等を擧げて綱要編纂委員に任じて其の仕事を進めたのであつた。随つて我妙滿寺派(顯本法華宗と公稱せるは明治三十一年十一月)から提案の起草は、明治二十八年復歸された本多上人を煩はして、本宗綱要一部を各宗協會に提出された。然るに編輯長島地默雷師は其中の四箇格言及び謗法嚴誡の二章を無斷で削除抹殺せんとしたことから端を發して、かの格言問題が起り遂に翌秋司直の手を煩はすことになり、佛教界に大波瀾を捲起した。

本多上人の師子奮迅の大活動がこれから展開される次第で、佛教各宗を對手にする目ざましい法戦を開始するには、内日蓮門下各派蝸牛角上の小争を去つて、妙宗統一の歩調を整へ、彼等權門の邪義を摧破し、以て一天四海皆娑妙法の祖訓を全ふし、立正安國の實を明治の聖代に觀んとすべく創設されたのが、妙宗統一團であつた。明治二十九年十二月五日淺草區新福井町三番地現在の報恩閣に統一團事務所を置いて「格言問題今後の大方略に就て日宗の教徒に檄す」といふ檄文を飛ばして、國家の爲め、正法の爲め鞏固なる大團結を爲して、勇猛な勢力を有せる活運動を爲すべき時が來たのである。既に日宗各派の名士に統一團組織の同意を得て居るから、來る十三日統一團團結式を江東井生村樓に擧げ、其席で今後運動の大方略を宣言しやう、といふやうな譯であつた。勿論統一團の目的は外權實起盡の法戦を進め内各派の團結力を以て祖願を貫徹するにありとして劃策されたのであつた。即ち團則中第六條に其目的が明示されて居る、曰く、

本團體は内妙宗各派の教義を比較的に講究し其旨歸を統一するを務め、外權實起盡の旨義を發揮し

各派の團結力を以て權門の淫祠教徒をして再び社會に立つ能はざらしむるにあり。

と、これに對する方法が、次の第七條に擧げてある、曰く、

本團體の目的を達せん爲めに左の方法を取る。

- 一、比較講究會を開き専ら教義を發揮する事
- 二、雜誌を發行して本團體の趣旨を表彰する事
- 三、演說會を設けて盛に教戰を開く事
- 四、各派共有の一大教堂を設立する事
- 五、此他實行すべき運動の方略は時々本部に於て劃策する事

斯の如く統一團は飽迄も大空のやうに少しも我執なく、外には權實起盡の法戰を進め、内には各派の異體同心にして祖願の貫徹に期すこと、申し換ふれば吾等は 日蓮立正大師の御内證から垂れられる御慈念に懷かれ、其の胸中から直ちに法水を酌み奉るべく、御遺文をこほして法華經を奉信し、本門の三大秘法を以て第一義として起つこの精神は、創設者本多上人御遷化後、微力なる吾人たりとも毫末も變化して居ない積りである。従つて各派の昔を思ひ、志を同ふせるの僧俗縹素は、お互に提携し協力して大願の達成に精進致したいものである。第七條第四項の『各派共有の一大教堂』とあるこの教堂は、我が音羽の教堂は貧弱狭小ではあるが、開放されて居るから各派で便宜活用することは自由である。

機關誌統一

圓則第七條第二項の『雜誌を發行して本團體の趣旨を表彰する事』に對へて本誌は明治三十年一月一日第一號を新福井町の統一團事務所から『統一團報』として發行し、始めは専ら四箇格言問題に對して究極の目的を貫徹するに努め、其後各法將の健闘善戰は遂にさしもの各宗協會も土崩瓦解に終結したので漸次團報も、明治三十五年十月、第九十號から單に『統一』といふ今の誌名に改稱され、統一歸正の主張、各種百般の論評、宗教文學、諸方面の寄稿、同志の運動報告等又は諸大家名士の講演などを掲載するやうになつた。

名は體を現はすといふやうに、統一誌は決して一宗一派に偏有せるものでなく、日蓮門下の機關誌であり、やがては各佛教徒の一大機關誌たるべきであらねばなるまい。無論統一といふからには混同ではない、そこには確立せる中心のあること申す迄もない事である。佛教上の統一であり、法華經上の統一であり、壽量釋尊已證の統一であり、大宇宙法界の統一であらねばならぬ。これが 日蓮立正大師唱道の統一主義であるまいか、本多上人の素願はこゝにあつたのであるまいか、かゝる統一の本質實名に歸つて大に名實一體の活動を爲さうといふことが誌名となつて『統一』と命名されたものである、このことは本誌過去の實録に徴して甚だ明瞭である。

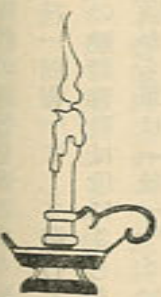
むすび

世間を見るに、宗教雜誌としては幾種類もあり、其の發行部数もあるものは數萬を算して居る、けれども多いから必ずしもそれがよいとはいへまい、例へば金銀は稀少であり瓦礫は夥多である。吾等は其

の量よりも質に於て、外形よりも内容に於て價值あらしめたい。

旭日に統一の表紙が約二十年も續いて人々は相當見厭いて居るだらうから、新意匠をこらせて時代向にしてはどの注告を受くることもあるが、吾等はこの古いことを一つの誇りとする。殊に本多上人滅後は一層懐しくこの表紙を思ふもので、唯其の内容が甚だ貧弱であることを申譯なく思ひモット充實に努力したい。物には榮枯盛衰あることであれば、團員誌友各位は單に高い廉いといふやうな普通雜誌の賣買觀でなく、これを手にするは直ちに人生の一大淨業に清淨するものである、護持正法の一端なりとお考へになつて、採るに足らぬ吾等と雖も、その赤誠に至ては敢て愧づべきものがないことも斟酌され、統一誌は佛教の眞價を世人に認識せしめんが爲め、教主釋尊の御本懐を知らしめんが爲め、又日蓮立正大師の佛教觀を知らしめんが爲めに教壇上に健闘を續けて居るものであることに、彌御高援をお願いしたい。

本誌主筆本多上人は最早御遷化後六年となるも、その遺稿は未だくゝ惠まれて居り、その御精神は依然脈々として誌上に永く流るべきことを誓ふと云爾。



宗教は國家觀念に基き教化を行ふべし

佐藤鐵太郎

凡そ人事は其源を智情意の活動に發し、其結合によりて成果を見ることが得べし。科學は理智を主とし、宗教は情慮を主とし、智情相顧み意思を以て之を維持し恒久ならしむ。是故に科學あり、宗教なきは未だ人事を盡すに足らず、宗教に提はれて科學を忘るゝときは其害恐らくは淫に終らん。是蓋し世を憂るもの、深く留意すべきところなり。然るに世人或は言をなすもの宗教を以て迷信の範圍を脱せずとなし、低級意識の發動に屬するものと迷斷し、何等尊敬の念を以て之を看ざるものあり、是實に國民の品性を高め、情操の向上を促さんと欲するもの、一日も黙止すべからざるところなり。宗教は低級意識

を啓開善導して、崇高なる人格を成さしむる所以なればなり。苟も國民として燃るが如き報本反始の情操に生き、國基の彌々堅實にして動搖なきを期せしめんと欲せば、必ずや爲政者自ら國家的宗教を尊重するの範を示して國民を導くと共に、深く宗教的觀念の正否によりて思想上重大なる關係を生ずべきを憶ひ、眞率に其選擇を慎むの氣風を養はざるべからず。要するに宗教は人心の奥底に深在して活動するが故に、もしこの點に留意せずして反て人心を惡化せしむるときは恐るべき禍根を宿すに至らん。是實に爲政者の深く注意すべき所なり。然れども我國現時の状態に於ては、餘りにも國民の信仰に關する

問題を放置し、宗教家も亦公平なる見地に立ちて國民に崇高なる宗教的觀念を興ふることを努めず、只管舊株を墨守し、營業的氣分に墜落して自ら悟らす全然宗教家たるの本分を忘れて之を顧みざるもの頗る多し。斯の如きは寧ろ國家を毒する所以にして一日も溫顔を以て彼等を視るべきにあらず、必ずや彼等をして宗教家たるの本分に覺醒せしめ、宗教の爲に宗教を説くのを捨て、立正大師の訓ゆる所の如く「先づ國家を禱りて須らく佛法を立つべし」との本義に歸り、少くとも世道人心の爲に之を説くべしとの本分を嚴守せしめ、力を極めて國民の修養上緊切なる宗教的觀念の鼓吹に盡力せしめざるべからず。然るに我日本に於ては維新以來物質文明に對する憧憬甚しかりし爲め、全然宗教を無視したるのみならず、反て之を排斥するに努めたるが故に是が爲め、國民思想に著しき缺陷を生じ、剩へ西洋文明の弊害をも模倣するの暇なく全然盲目的に之を輸入

低き如何はしき身を以て傲然自尊の態度をとりて衆人に臨み、國法の許すに委せて量酒に親み、何等俗人と選ぶなきの生活をなし、而かも門前に量酒山門に入るを許さずと明記する石碑を存置するもの亦少からず。吾人は宗教家の肉食妻帯を否認するものにあらず、寧ろ之を當然なりと信するものにして、又決して葬祭を嚴修して故人を尊崇するを否認するものにあらずと雖も、葬典の主幸と、世の所謂宗派的説教を以て宗教家の天職を全うするものとして之を見るが如きは、吾人の斷じて取らざる所にして力めて葬祭本位の弊を去り、布教本位の宗教となすは吾人の深く望むて已まざる所なり。之を要するに宗教の本質は暫く措くも、現存宗教の取る所にして苟も我が國體の本義に背き、國民の道德及思想に悪影響を及ぼすの患ありと認むるときは、假令國民の一部は之を信奉するも之を善導して其信仰を離脱せしめざるべからず。然らざれば自ら國民思想の混亂を來

入したりし爲め、終に不健全なる思想を國民間に播植するの因をなすに至れり。從て今日の急務は、我帝國の國體に合する宗教は努めて之を佑け、其然らざるものは之を斥るの所置をとらば、國民思想の善導上少からざる効果を生ずるを見ん。吾人は以上の見地に立ち、國家的宗教（渾然たる人類的宗教觀の鼓吹に捉はれざるを要す）の振興を期すると共に國體的自覺なき宗教及宗教家を淘汰して彼等の奮起を促し、宗教に關する彼等の見地の當否は之を彼等の研鑽と對究とに委ね、而かも嚴格に之を督勵するの態度をとり、儉安姑息の陋風を一掃し、勇猛精進の心を起さしめ、敢然立て國家的精神を振作するの態度に出でしめんことを要す。然るに世の所謂宗教家を見るに獨り國家的本分を輕視するのみならず衆生を濟度して正道に導くの本義を蔑視し、葬儀の主幸を任として葬商の態度をとり、「附け届け」の厚薄と香奠の多寡とを以て式典の簡賤を定め、學徳

し將來の禍根また茲に培はるゝに至らんこと蓋し明かなり。吾人は世法と同一地に立脚せざる正しき宗教あるを信ぜざると同時に、世の宗教家が手段の爲に目的を忘れて顧みず、宗教は決して宗教其物の爲に存するものにあらずして世道人心を整へ、社會の面目を美化せんが爲に存するものなりとの第一義を忘れ、國體の眞義をも没却せんとするが如きは最も注意して之を剪除せざるべからず吾人は茲に再言す宗教の第一義は我が國體の深厚なる大意義を顯揚するにあり、而して我國體の深厚なる大意義は其本源とする所敬神崇祖と報恩反始とにあり、而かも其最も注意すべきは其終局に於て之を皇祖の御一身に統一せしめ世界の人類をして之を仰がしむるにあり。吾人は統一誌の五百號を重るに際し、所信を述べて祝詞に代ると同時に、吾人等立正大師の門下は常に「國家を禱りて須く佛法を立つべし」との聖訓を服膺して、過るゝことなきを望むものなり。

地引御書を拜讀して

笹木欣爾

二八

上 佛天の御加護のしからしむる處とは存せられませんが、同時に又、祖師上人の高教を仰ぎ、且つは亡き日生上人の鴻徳を偲ばすには居られません。

法華經と御遺文全集とは、私共本化門下にとりましては、誠に生活の源泉とも稱すべきであります。これ等をよく拜することに依つて、私共はどれだけ盡きざる感激と限りなき情熱を、實生活の上に與へられてゐるか計り知れませぬ。

法華經と御遺文全集との間には、勿論、勝劣輕重のつけ得べき筈は毛唐ありません。が、祖師上人を

已に目睫に迫つた十一月には、吾が『統一』が、目出度も第五百號に到達することになりました。年を改めることに實に四十一、號を加へること正に五百とは、一口に云ひ捨るなら何でもありませんが、しかし思へばよくも續いたものだと思われまします。それに、此の古くして而も尊い教誌が、その永い過去に於いて、どの位多數の人の魂をよきに導いたか、又現に導きつゝあるかを考へるならば、永く續いたと云ふことに對する單なる驚きに加へるに、更に法國のための慶賀を以てせねばなりません。これ一に、

思慕し、その御生活を知らうとする上では、御遺文全集に寄るに如くはありますまい。私は、上人を此の上もなく御慕ひ申す一人であります。そして御遺文集を日頃讀いたすばかりであります。

十一月と云ふ月に因む御遺文として、弘安四年十一月二十五日、聖壽六〇、波木井殿におあてになつた所謂地引御書などは、短いながら、愛讀措くあたはぬものがあります。

地引御書は、これより四年前の建治三年十二月、聖壽五十六にして上野殿へお與へになつた庵室修復書と併せ拜しますと、一層よく了解が出来ます。文永十一年六月、上人が身延御入山の折造つた御草庵が、四年後の建治三年には、雨露をさへしのご難きに至つたので、同年十二月、一往修復されたのです(以上庵室修復書)それも戀ていたみ始めたもの

か、修復後四年の弘安四年十一月には、波木井氏の篤志で、十間四面の大坊、及び小坊、既等が出来上りました。此の時の工程やら、落慶の日の有様やらを、波木井氏宛に御書きになつたのが、地引御書なのであります。尙、大坊とは、御本尊を奉安し、兼ねて御講學などを遊ばす所、小坊とは、祖師其他御弟子等が起居なされた所ではないかと想像されます。小坊は別棟にでもなつてゐたのでせう。今、この工事の日程を、この御書に依つて圖示すると、次の如くになります。

□十月——

二十四日間と云ふもの、一日も雨ふらす。坊の敷地にせんとして、山を切り崩し、地ならしす。思ふに、此間、工事は順調に進捗したことでありませう。

□十一月

一日——小坊づくり、既つくる。

七日——大雨。

八日——曇天なれど暖。大坊の柱だてす。

九日——曇天なれど暖。屋根を葺く。

十日

十一日

十二日

十三日

十四日

此の四日間、大雨大雪ふる。

廿三日——晴。

廿四日——晴。工事竣成。

廿四日、落慶の日の有様を述べて

「御堂の廣さは十間四面で、それに庇を造り足して竣成した。十一月廿四日は、天台大師の忌日で

三〇

あるから、その報恩會並に嘉齡延年の舞樂を、思ひ通りに執り行つた。この日は朝の八九時頃から御本尊の前に集つて、三十餘人で法華經の一日頓寫を修行して、夜明けの三四時頃に無事に堂供養の式儀をすました。中略。二十三日、二十四日は又一天が晴れて寒くなかつたから、堂供養の二十四日は、人の參詣することは、京、鎌倉の夕景の四時か五時頃のやうに賑かであつた。斯く天氣都合もよく、參詣者も多く、盛大な供養會を執り行ふことの出来たのは、定めて佛天の御計ひによるものと思はれる」——龍吟社版講義による。以下敬之——と、仰せられて居ります。よく拜するなら、これは六百五十年前の遠い昔の光景とは思はれず、すぐ目の前に美しく躍動する繪巻物を、あり／＼と見る様な氣がいたされます。更に、工事の様子を御書きなつて居ります。

「次郎殿—波木井氏の息—等の方々は、親の仰せ

付けもあつたらうが、殊にこの大坊建築に心を入れて居られたから、自分で地ならしをしたり、柱建てをなされたりして下すつた。その他、藤兵衛右馬の入道、三郎兵衛殿等御一族の人達までが、皆熱心にこの普請に盡力して呉れた厚志は、忝なく思つて居る」

師のため、法のために喜々として働く人々の動きがよく察し得られます。

此の頃の 上人の御健康は、餘り面白くはありませんでした。十一月廿五日附のこの御書に續く、十二月八日附の上野殿母尼御前御返事には、

「この（身延在山）八年が間は、齡は寄る、病は多くなると云ふことで、年々に身體は弱くなり、心は老耄^{わがは}れ、殊に今年の春からは、今の病が發つて、秋過ぎ冬になつては、日々に身體が衰へ、病

とあるのでも、その大凡は判るわけでありませう。が、大坊建築中の十一月上旬中旬の頃には、暖い日など工事現場へも時に御見廻りにいらしたのではありますまいか。それとも、同月下旬からの上記の如き重い御病狀から推して、工事中すつと御臥床なされ通しだつたでありませうか。私には、御輕症の暖い日などには、矢張り御いでなつたやう、何となく思はれてなりません。しかし、まだ御元氣であつた『庵室修復書』の

「今年（建治三年、壽五十六）は十二本の柱がガタ／＼になつて、四方に倒れたために、全部の壁はドーと一度に落ちて仕舞つた。かうなつては神にあらざる凡夫の身とて、保たう筈がないから、

雨は降らずに月夜ばかりが續くやうにと念じつゝ、
工事を斷んで居たが、鳥も通はぬ山中のこと、人
夫がないので學生達を叱りつゝ宥めつ精を出させ、
その上、食物がないから雪を嚼んで辛くも命を支
へて來た。下略』

と云ふのに較べますと、大部事情が違つて來て居り
ます。

○
身體は石のやう、胸は氷のやうと云つて、上人は
山の寒さを云はれて居りますが、十一月や十二月の
頃の山中の寒氣は、又格別であつたものと考へられ
ます。(今の正月二月頃です)この御書にも

『十一日から十四日までの間は大雨が降り、それ
が大雪となつて、今も(降雪十日後の十一月廿五
日)里には雪が残つてゐる。山には一丈二丈の大
雪が積り、それが凍つて鐵のやうに堅くなつてゐ

る』

とありますし、池上氏宛の御消息によりますと、弘
安元年(壽五十七)の十一月中旬には矢張り大雪が
あつて古老さへが全く經驗したことのない寒さだと
申したさうであります。かゝる寒さの山中にありま
しては、事實御身體にもよからうわけがありません
ん。石のやう、氷のやうなる御達懷は、萬更、形容
のための誇張ではありますまい。

○
その一入寒い十一月も下旬の廿四日、晩春を思は
せるやうな暖い晴れた日の元に、目出度くも大坊を
落成された時の 上人の御心境のどんなものであつ
たかは、私共にもほど考へ付き得るのであります。

○
大坊の廣さは十間四面とありますので、約百坪と
思はれます。これが、十一月の八日に柱だてをし、
九日十日の二日で屋根が葺け、廿四日には早くも落

成してゐるのですから、内側の仕事は正味二週間前
後で完成したことになるます。それに、十一日から
四日間は大雨大雪が降つてゐますから、同じ二週間
の仕事でも、相當能率が減殺されて居りませう。こ
うなりますと、蔭にどんな手筈があつたにせよ、何
としても工程の早過ぎるのに、若干の不審を起さぬ
わけに行きません。この御書に

『或人などは、この様な大坊は、鎌倉では錢千貫
文でも出來まいといつて居る程の大きなものであ
る』

とあるので、ます／＼不思議になつて參ります。

○
『地引御書を拜讀して』など、云ふもの／＼しい
題は掲げて、別段新しい發見があるわけではなく
又面白い感想が湧いたのでもありません。十一月と
云ふ月に因む御書として、たとひそれは短い一篇で
あつても、つゞましく拜するなら、こゝにも 上人
思慕の情を充たしてくる數々があることを、にほ

はし得れば充分であります。

漢の武帝は、反魂香を焚いては、亡き李夫人の靈
をかへして、其の姿を見たと言へられます。私共は
御遺文全集を反魂香にもなぞらへて、少しでも鮮明
に 上人の生ける御姿を、我れどわが胸中に描き出
したいものであります。 一一一、一〇、一〇一



關田師來信

拜啓 過日は態々御訪問被下候處何の風情も無之失禮仕候 其節御依頼の五百號記念の原稿早速記述可申上の處拙者元來多病の所へ過般來の殘暑は例年に無く嚴烈の爲 病體にはいたく感じ心身共に疲勞困憊甚しく到底筆述の勞に堪へず此分にては乍遺憾貴意に添へ難く候條不惡御諒承被成下度候

先は要件のみ 恐々

九月廿日

關田日城

信仰に入るまで

増野純亮

私の家は、遠い祖先から真宗を奉じて居りました。私の父の時代、所謂排佛毀釋の思想にかぶれて佛像も位牌も川に流してしまつて神道に入り、明治三十三年父の死後、祖母や母の希望によつて再び以前の真宗に復歸したのであります。

私が宗教と云ふものに多少の關心を持ち出したのは、大正七年私の三十四歳頃からでありまして肺尖を病んで約半年静養をした當時からであります。私の友人に、長岡と云ふ東京の高等商船を出て亞米利加航路の船員をして居つた人がありまして、

此人が航海中病氣にかゝり、鎌倉で静養中、偶々雇入れた附添のお婆さんが熱心な天理教信者であり、其人の行動に感心をして遂に自分も熱心な天理教信者となり、病氣が輕快して歸郷してから、私が病氣で寝て居ると云ふ事を聞き、毎日私を病床に訪れ熱心に天理教の話を開かして呉れ、一時は其友人の眞剣な態度に動かされ、進んで天理教を研究して見た事がありました。行詰りまして間もなく止めてしまひました。長岡君は其後遂に没くなりました。此男も間もなく天理教を捨てしまつたさうであります。然しながら此天理教から私が逃げ出してしまつたとは申せ、僅か一二ヶ月の研究が、人間生活の

上には是非宗教的信仰が必要であると云ふ觀念を私の頭に植ゑつけたと云ふ事は、天理教に對して感謝せねばならぬと存じて居ります。

爾來私は何れかに信仰を求めたいと思つて居りましたが、佛教と云ふものはランで信仰する氣になれない。説教を聞きに行けば、新しい下駄と履きふるしのボロ下駄とがすり替へられる。位牌堂に線香やマツチを置けば、何時の間にか消えて無くなる。何やら宗の議員選舉には昏んに贈收賄が行はれる、祇園のお茶屋で坊主頭に鉢巻をしてステテコを踊ると云ふに至つては、衆生済度も何もあつたものではない。「僧は俗より出で、俗よりも俗なり」で、弘法大師か誰れか後世僧侶は俗人よりをしへられる時代が來ると豫言せられたと聞いて居るが、今正に其時代である。佛教は過去の宗教で既に生命を失つ

た教である。僧侶は葬式を業とする職業的存在に過ぎないと云ふ風に考へて、佛教と云ふものに對してはむしろ憎惡と反感を以て見て居つたのであります。

斯く佛教と云ふものに對し憎惡を感じて居つた私が、日蓮主義にのみ不思議に淡い憧憬の心を持つて居つたのであります。皆様甚だ奇怪にお感じになる事と思ひます。此事をお話するには順序として、小高君と私の關係からお話しせねばなりません。小高君と私は時代は少し違ひますが、同窓の出身で同じく内科を専門として居るのであります。私の當地開業以來年を逐ふて親密の度を加へ來つて居るのであります。

に罹り、私が永らく診療をして居つたのであります。が、病氣はだん／＼進んで参りますし、精神的にも随分煩悶して居る。私も遠方で度々往診するのに困るし、一方精神的に患者を救ふ必要を感じまして、家族の人にも話をして岡君の診察を小高君にお願ひしどうか岡君を信仰に導き精神的に救つて貰ひ度いと云ふ事をおたのみしたのであります。其後岡君は小高君のお話によつて熱心な信者となられ、同時に病氣も恢復、以前に優る健康體となられたのであります。これが小高君と私との宗教的交渉の第一歩であつたのであります。

其後小高君に接する毎に、君の人格に漸次崇敬の念を高めまして、君の此崇敬すべき人格が全く日蓮宗信仰より來るものなるを考へまして、茲に日蓮主義に對し關心を持つに至つたのであります。一度小高君から日蓮主義を聞かして貰ひたいと申して居りましたが、昨年私が病氣に罹り小高君の

診察を受けましたけれども、まだ機縁熟せずお話を聴くに至らず、其後お互仕事に逐はれまして、其機會がありませんでしたが、本年七月再び病を得まして小高君の診察を受け、私から進んでお願ひをしてお話を聴かして貰ひ、また色々の日蓮宗に關する書物を讀まして貰つたのであります。

これによりまして吾々人間の生命が永遠に實在するものであり、それが因果應報の理によつて支配されて行く、そこには常住不滅の如來が晝も夜も間斷なく慈悲の光を與へてお守り下さると云ふ事を本當に悟る事が出來まして、心の底から感激と申します。歡喜と申しますか、何だか進んで聞きたい、進んで讀みたいと云ふ勇躍の心持が湧いて參つたのであります。所が宇宙觀に於きまして、吾々は大自然から非常

なる恩恵を受けて居る、空気がなくては生存を許さ
れない、太陽の光と熱が無かつたら總ての生物は枯
死してしまふ。砂糖一斤買ったのは有難い感謝す
るが、此大自然から受ける絶大の恩恵に對しては、
殆んど感謝の念すら起さないのであります。

宇宙萬有の動きのある所、そこには必ず目的がな
ければならない。目的のある所精神が無くてはなら
ぬ、此宇宙の大精神と、常住不滅の如來との關係が
色々書物を読んで見ても、どうもしつくりしないで
色々と惱んだのであります、本多日生上人の最善
の信仰と云ふ書物の終りに近い所に『宇宙の總ては
そんなに慈悲深く情けあるものであるが、日光だど
か、水だどか、空気がどか、食物だどかに對して一
一我々は感謝して涙を流すと云ふやうに出て来ない
そこで人格に現はして来る、即ち斯う云ふ正しい有

難い宇宙を一つの體に現はし給ふ、これを佛、如來
と申して妙法其物が人間に現はれ、本當に心から優
しきをもつて大勢の身をお救ひ下さる云々」と、あ
るのを讀みまして、初めて宇宙の大精神それが本佛
のお働であること云ふ事を悟りまして、眼界の一時
に開けた様な感じが致しまして最初に見た本佛が急
に大きくなり、絶對のものとして感得し得るに至つ
たのであります。それから云ふものは、雲の動き
水の流れにも眼界到る處本佛を視ると云ふ風になり
まして、全く法悦の日々を送らして頂いて居るので
あります。

吾々は此洪大無邊の恩恵に對し、刻々自己を反省
して感恩奉謝、所謂菩薩行を積まして頂かねばなら
ないと存するのであります。 一一九、一二一

身延に詣りて

金子光和

今年も例年の如く、十月一日身延山祖廟にて勅額
奉戴式典が行はるので、九月三十日夜新宿驛を立
つた。今年の一行は極く少なる人数であつた、此春
會の要路者達に若干の移動があり一般への宣傳も充
分でなかつた事と思ふ。兎に角自分は祖廟に参拜す
る事は最も有意義のものと考へる。丁度我々が在俗の
ものが、先祖や父母の墓を訪るが如く、題目を唱
ふる全てのものは、必ず祖廟に参つて心から合掌し
て欲しい。ソコには何等我執や偏見をなくして、虚

心坦懐に異體同心となつて是非來拜を實行した
い。此實行、此の思想が日本國民の道德的根幹であ
る。殊に至孝にましました大聖人は、身延の御草庵

より五十町の嶺に荆棘を拂ひ、險阻の峭壁を躋攀し
縹渺たる雲煙、水天髣髴の間に東方を望み、我が父
母を葬むり奉れる地は彼方ぞと雙親を景慕し、泫然
として、涙を灑がれた。後年日朗上人は其地に思親
園又は育恩堂と稱する堂を建られ、此顯跡は大聖人
が身を以て垂れた活ける教訓である。孝道は東洋倫
理の特粹、精華で、此思想の實行を充分徹底させる
事が大切である。

大聖人が九ヶ年御静居せられた身延、御遺文を通
じて追憶してみたい。

『余に三度の高名あり。一には去し文應元年七月
十六日に立正安國論を最明寺殿に奉りし時……二

には去し文永八年九月十二日申時に平左衛門尉に
向つて云く……三には去年(文永十一年)四月八日左衛
門尉に語つて云く』云々(繪圖二二四)

文應元年已來大聖人は天下を諫曉すること三度せ
られたが、北條執權は遂に捨邪歸正の誠意ない。佐
渡御赦免後北條は曩日の如き傲慢不遜の體度でなく
緩和の手段に出で、宗門弘通の免狀を與へ、尙ほ新
に天下の祈願所愛染堂を建立して其別當職に補し莊
田一千町歩を寄附すると申されたが、大聖人は却つ
て大に嘆息され、我が言を用ゐずして徒に免狀を云
云するは、唯我大法に諂ふのみとて、茲に文永十一
月五月十二日三衣一鉢、飄然と狭の身延に且遷せら
る。

『國の恩を報ぜんが爲に國に留まり三度は諫むべ
し。用ひずんば山林に身を隠せと云ふ本文ありと
本より存知せり、何かなる山中にも籠りて命の程
は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外は他事な
る。』

し、時に五十三、同じき五月十二日、鎌倉を立ち
て甲斐國へ分け入る』(繪圖二二二)

身延山開基大檀越、南部六郎波木井實長公は新羅三
郎義光氏の後裔、南部家の始祖源光行卿の三男にて
甲州南部に産る。幼時鎌倉に出でて將軍實朝に仕へ
る。正嘉元年の夏、公偶々鎌倉幕府に伺候の折、大
聖人小町の辻に立ちて、破邪顯正、開權顯實を獅子
吼せらるゝを聽き大に悟るところあり、飄然と舊宗
を捨て正法に歸し、堅く師檀の契りを結ばれた。

茲に五月、聖人身延入山せらるゝや聖人の意志に
隨ひ、鷹取山の麓西谷に一町ばかりの平地を見定め
荆棘を伐り、砂磧を平げて、三間四面柱十二本の草
庵を築き、翌六月十七日庵に入られた。

『五月十二日鎌倉を立ちて、甲斐の國へ分け入る、
路次のいぶせさ峰に登れば、日月をいたゞくが如
し、谷に下れば穴に入るが如し。河たけくして船
渡らず、大石流れて箭をつくが如し、道は狭くし

て繩の如し、草木茂りて路見えす、かゝる所へ尋
ね入ること、淺からざる宿習なり。かゝる道なれ
ども釋迦佛は手を引き、帝釋は馬となり、梵王は
身に立ちそひ、日月は眼に入りかはらせ給ふ故に
や。同じき十七日、甲斐の國波木井の郷へ著き

ぬ。波木井殿に對面ありしかば、大に悦び今生は
實長が身に及ばん程は見つぎ奉るべし、後生をば
聖人助け給へと、契りし事はたゞごとも覺えず
偏へに慈父慈母の波木井殿の身に入りかはり、日
運を哀み給ふ歎云々(繪圖二二二)

大聖人の法悦や知るべし。而して公は同年十月末代
三寶供養の資料にとて、方十三里(當時六町一里)の山
林を大聖人に寄進し奉る。嗚呼公が護法の至誠、誰
か感激せざらんや。

山林寄進の置文

在り故十三里立四方界、今日蓮聖人寄附之。
自今以後吾一家輩、身延事不可存粗略。若異

意之旨於有之、佛法僧勿論、於吾不忠不孝罪
科問、未來際迄子孫好滅亡處、依而如件

文永十一年甲戌十月廿四日

南部隱士 波木井實長入道判

南部太郎實友其一家中

右の置文は身延の寶藏に現存せらる。大聖人は幽寂
なる延山、青巒疊々、流水滾々として限りなき本地
の風光を愛で、

『誠に身延山の栖は千早振る神もめぐみを垂れ、天
下りましますらん、心無きしづの男しづの女まで
も心を留めぬべし。哀を催す秋の暮には草の庵に
露深く、檐にすだく蜘蛛の糸玉を連き、峯の紅葉
いつしか色深してたえ／＼に傳ふ懸樋の水に影を
うつせば、名にしおふ龍田河の水もかくやと疑
はれぬ。又後には蟻々たる深山そびへて梢に一乗
の果を結び、下枝に鳴く蟬の音溢く、前には湯々
たる流水湛へて、實相真如の月浮び、無明深重の

開晴れて、法性の空に雲もなし。かゝる砌なれば
庵の内には晝は終日に一乗妙典の御法を論談し、
夜は竟夜要又誦持の聲のみす、傳へ聞く釋尊の住
給ひけん鷲峰を我朝此砌に移し置きぬ。……觀念
の牀の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の音に目をさま
し、我身の内に三諦即一、一心三觀の月曇りなく
澄けるを、無明深重の雲引覆ひつゝ昔より今に至
るまで、生死の九界に輪廻する事、此砌りにしら
れつゝ、自らかくと思ひつゞける。

立わたる身のうき雲も晴ぬべし

たえの御法の鷲の山風（繪圖二一九七）

文永十一年六月十七日構へられたる御草庵も、遠
近渴仰の信男女、隨身給仕の弟子等年々歳々に其數
を増して最早三間四面の小庵にては狹隘を感じ、且
つ漸く腐朽し初めしを修覆せられ一時を凌がれた。

「文永十一年六月十七日に此の山の中に木をうち
切りて、かりそめに庵室をつくりて候ひしが、漸

日までは大雨ふり、大雪ふりて今に里に消へず、

山は一丈二丈雪凍りて堅き事鐵の如し、二十三日
四日は又空晴れて寒からず、人の參る事洛中鎌倉
の町の申酉の時の如し」云々（繪圖二〇八〇）

大聖人は建治弘安の交より痾病に罹らせられ、四
條氏も絶えず良藥を進められてゐた。然るに弘安四
年七月御再發、翌五年夏は頓に病勢が募られ、弟子
檀越の切なる願ひを容れ、常陸へ湯浴せばやと同年
九月八日御草庵を御出立せられた。然し御容態はよ
くなく、池上宗仲が厚き看護を受けられしも、一期
の化縁の畢らせ給ふのか、池上邸にて十月十三日慈
顔笑みを含み、實體ねむるが如く大涅槃に入せ給ふ。

「穢ひいづくにて死に候とも、九ヶ年の間心安く法
華經を讀誦し奉り候山なれば墓をば身延山に立て
させ給へ、未來際までも心は身延山に住むべく

候」云々（繪圖二一四四）

く四年が程柱くち牆壁落ち候へども直す事なくて
夜る火を燈さねども、月の光にて聖教をよみまら
らせわれと御經を卷き參らせ候はねども風自ら吹
返し參らせ候しが、今年は十二の柱四方に頭をな
げ、四方の壁は一所に倒れぬ」云々（繪圖一六五七）
波木井公は弘安四年十一月、十間四面の堂宇に改
造して、是の時身延山妙法華院久遠寺と大聖人より
扁名を賜はつた。

「坊は十間四面に又庇さして造りあげ、二十四日大
師講並に延年心の如く仕りて、二十四日の戌亥の
時御所に集會して、三十餘人を以て一日經書き參
らせ、並に申酉の刻に御供養すこしも事ゆへな
し。坊は地ひき山づくり候ひしに、山に廿四日一
日も片時も雨ふる事なし。十一月朔日の日、小坊
つくり馬や作る。八日は大坊の柱だて、九日十日葺
き候了んぬ。然るに七日は大雨九日十日は曇りて
面も暖かなる事春の終りの如し。十一日より十四

身 延 山

老樹參天聳 法堂山四圍
仰看眞佛在 靈鷲水翔飛

延 巖

延巖棲神境 風泉碧樹間
一輪天上月 長照事靈山

思 親 閣

峻嶺思親閣 躋攀萬里青
追恩情切々 遙拜慰精靈

登 輿 院

聖祖陟斯頂 追懷父母恩
低徊不堪去 千載至情存

祖 廟

聖廟森嚴老樹存 多年默諫渥慈恩
溪聲山色今如古 千載猶留上行魂

身 延 山

遠上延山絕俗氣 群峰秀色簇慈雲
觀來實相眞如景 靈氣迫人催內薰

親切

四四

橋 本 辰 居

佛是れを説きたまふ時、娑婆世界の三千大千の國土地皆震裂して、其の中より無量千萬億の菩薩摩訶薩あつて同時に涌出せり。是の諸の菩薩は身皆金色にして、三十二相無量の光明あり……一々の菩薩皆是れ大衆唱導の首なり。各六萬恒河沙等の眷屬を將ゐたり。況んや五萬、四萬、三萬、二萬、一萬恒河沙等の眷屬を將ゐたる者をや……是の如き等比無量無邊にして算數譬喩も知ること能はざる所なり。(法華經)

何といふ嬉しいことであらう。本化地滿千界の大菩薩は無量無邊にある。何もすることは無い。唯々讚め頌え合ふて楽しく暮さうではないか。尊き上人

手はにぎり合ひさへすれば、無限に地のはて迄も伸びるのだ。かくて初めて佛國土の建設は可能となる。

お互の親切こそは全てを結び合はす手なのだ。親切とは血族間の親しき感情を他に及すことをいふ。愛と異なる所は、愛が殆ど純粹に個人對個人間の感情であるに對し、親切は家族を基礎とする個人對個人間の感情であり、愛に比し一段と全體主義的感情を多分に保有してゐる點にある。又愛はどうしても愛欲と區別し難いに反し、親切は又深切とも作り、まごころそのものである點も違ふ。日本道德の根本が忠にあり、それが家庭に及んで孝となり、それが更に家庭外に及んで、親切となることも云ひうるであらう。外國人は矢張り愛といふ言葉を使ふが、日本人は親切といふ語を用ふことが多い。日本人にとつては本當に大切な言葉になつて居る。こゝに於て二三親切について考へて見やうと思ふ。

先に親切は親族間の感情を他に及すものであると

善知識は云ふも更らなり、師も、友も、道に會ふ人も、どうしてこんなに立派なのだらう、懐しいのだらう。庭の小鳥さへあんなに嬉しさうだ。浮き浮きと何やら囁つてゐる。日の大御神、天の岩戸よりお出ましになつたとき八百萬の神々は

天晴れ

あな面白

あな手申し

あなさやけ

をけ

と歌ひ舞ふたといふ。お互は文句なしに先づ手をとり合はふ。そして手伸しく前進しようではないか。

いつた。

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

我子ならば樽拾ひはさせまいにと、誰か一讀熱涙を覺えぬものがあらう。熊谷次郎直實は、我子小次郎を思ふては、敦盛の頭をかくに躊躇し、一管の笛に慟哭した。我身を捨て、人を思ふことは、實に親子間に初まる。親は子を慈み、子は親を慕ひ、君を大親とし友を兄弟とする。是が正しき姿なのであらう。妻子に薄く淫女に厚く、親は捨て、省みざれども他人には親切であるとは處りなきことである。さればこそ若し親にして子を愛しえず、子にして親を敬しえざるときは、激痛の襲ふ所となるのである。雷電はためく荒野の中に茨の冠を戴き、不孝の娘を呪ひ狂ふリヤ王、父の亡靈に責められて息も絶え絶えのハムレットが母に訴ふる切々の諫言、道化者フョードルの子イヴンが見るあのえぐるやうに深刻な懷疑の世界等皆之が實例である。外國に例を求めな

くとも一寸目を開けばかゝる痛しき事實をあまた發見する。増一阿含經に

後世の人民皆當に給足するや貧窮を養親せず、
同生を親近せずして反つて他人の富貴なるに親しみ、相従つて共に相饋遺(おくりもの)すべし。

とある通り、親兄弟と雖も、貧賤なれば手紙一本やることなく、而も富貴には争つて親み行くのである。我等の富貴幸福を求むる念は實に深い。親にして貧しくば親を尊敬することは出来ないのである。必然非常な苦痛に襲はれる。貧よりつらき病なしとは只に物質上肉體上についてのみではないからであらう。嗚呼我等は唯々親切でありたい。さてお互に親切にし合ふ場合、その親切の態度に二つある。一つは心のまゝに好きは好き、嫌ひは嫌ひとして、好きな人へのみ親切である所のはつきりした態度。他は即ち人に親切たらんとして努めて親切にする態度の二つである。我等は修身の教ふる所に従つて、後

飾る所なき、こだはる所なき自然の儘の御姿にあるのである。我等は我等の先祖の如く大膽に、男らしく思ふが儘に振舞はふか。餘りにも偽り多き世にあつては、寧ろ赤裸々の感情其儘に行動した方が良いのではなからうか。

併し乍ら思へ、人の感情の如何に刹那的であるかを、其儘に放置せば、恐らくは爲さざる所なきに到るであらう。見よ佛陀の制戒を「諸惡は作すこと莫れ、衆善は奉行し其の意を淨ふせよ」とあるではないか。我等の心の廣大なる、何れが眞の自我なりや甚だ認め難い。且に此を愛すれば夕に彼を愛する。この定めなき心を整へ一定の方向に趣かしむる所に人格がある。人格とは開顯統一である。つまりその人らしくあるといふにある。人は各その特色を極端に迄發揮する時、最もよく國家に貢獻し、全體に一如し得る。されば人格の高さは統一の固さに依る。統一の固さは方向の如何に依る。壞れ易き物質を追求するよりは、永久に搖ぎ無き我此土安穩の境地を願求する方統一は固く従つて人格も高い。動搖定めなき小我を離れ、不毀の淨土に向つて邁進しよう。『如

者の態度を探るべきであらうか。之によつて君子の名を得、上下より畏敬せられるのも亦快い次第ではないか。併し乍ら親切も押し賣となつては之程嫌なものなからう。自らを欺き、人を欺くことによつて、自ら嫌惡の念に苦むのみならず、その相手までが苦むことが多いのである。實際この嫌惡の念程不愉快なものはそうあるものではない。極樂寺の良觀様は、日蓮聖人に折伏されなくとも相當この嫌惡の念で苦んで居たことであらう。彼は少しも愛を感じずして手づから癩患者を洗ひ、大して慈悲を感じた譯でもないのに犬を集めて食はしめ、厩を建て、病馬を養つた彼は國家よりも犬や馬を重んじ、又犬や馬よりも自分の善行を愛したらしい。古事記を讀むことは極めて楽しい懐しいものである。それは單にその中に出て來る神々が我等の先祖であるが爲めのみではなく、況んや道德堅固であるが爲めではないであらう。其の無限の魅力は神々の天真流露、何ら

來のおしへは不可思議微妙の功德を具足し成就したまへり、教戒の所行は安穩快善なり。我今日より復自らの心行に隨はじ、邪見、憍慢、いかり、諸惡の心を生ぜじ」とは妙莊嚴王のみの述懐であつてはならない。

釋尊の御降誕は偏に我等衆生極重の苦を救ひ給はんとこの思召からであつた。我等は何といふ罪深いことであらう。佛陀在世の時すらみにくき争を止めなかつた。俱尸那城外双樹の下にありし世尊の、血涙を絞りにて教戒せられしは

汝諸の比丘よ、今當に眞實に汝等に教敎すべし、
我れ今現在せり、大衆和合せよ(哀嘆品)

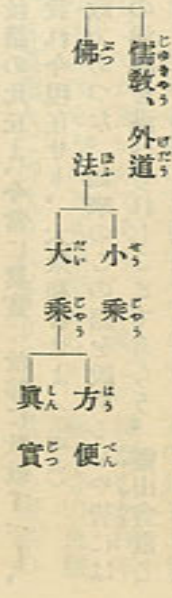
の教敎であつた。如來のこの語を説かるゝや皆には萬斛の涕涙を湛へられしことであらう。靈山會散じてこゝに三千年釋尊は現在せらるゝであらうか。現在せられぬであらうか。否法華經を信する者の前には佛の滅後であつても在世である。我等は大恩教主釋迦牟尼如來を思ふが故に、我等の心の知り難きが故に、せめて形だけでも人には親切でありたい、ア親切でありたい。

開目鈔講話

(第二講)

小林一郎

これから本文に就てのお話に入るのでありますが、この開目鈔は、この間も申したやうに、法華經を信する者が如何なる態度を以て、又如何なる決心を以てこの信仰を貫くべきかといふことを説かれるのが主であります。併ながらいきなり佛様の尊いといふことを説きましても、なか／＼一切の人の心に入りませぬから、それで法華經といふものを説く前に、佛敎と佛敎以外のものと比べ合せて、さうして佛敎の大事なことを先づ明かにし、それから佛敎の中に於て又大乘と小乗とがありますので、その大乘と小乗とを比べ合せるといふやうな組織になつて居ります。



一番初めに「佛・外・内」と言つて、「佛」といふのは孔子の敎、「外」といふのは所謂外道であります。外道といふのは印度の婆羅門やなにかを總括して言ひます。廣い意味で言へば孔子の敎でも何でも外道といふ中に入れて宜いのでありますけれども、姑く區別をして佛・外・内と言つて居ります。佛敎即ち孔子の敎と、外道即ち印度の佛敎以前の敎、それから「内」といふのは内道すなはち佛敎、斯うい

ふものを二つ比べ合せて、この儒敎乃至外道よりも佛敎の方が勝れて居るといふことを先づ明かにするのであります。それから佛敎の中に於て今度は「小乗」と「大乘」を區別して、小乗よりは大乘の方が勝れて居るといふことを明かにし、それからその大乘の中に於て「方便」の敎と「眞實」の敎とを比べ合せて、眞實の敎が一番勝つて居る、斯ういふことになるのであります。この順序が狂はないやうに讀んで参りたいと思ひます。先づ一番初めの所は、佛敎と佛敎以外のものを比べ合せる一段であります。佛敎以外の敎もそれ／＼價値の有るものですが、これは佛の敎に比べればまだ浅いものだといふことを明かにしてあります。それから進んで佛敎の中の大乗と小乗との區別、又大乘の中に於て方便の敎と眞實の敎の違ひといふやうなことがだん／＼に詳しく説かれて参るのであります。

ところでモウ一つ根本は、佛敎にしたところが、

或は儒敎や外道にしたところが、これは皆人間の道を説いたものでありますから、人間の道を辨へるといふ考がなければ、ナニも敎といふものに寄りつくことは出来ない譯である。それで一番初めにはその事を言つてあります。人間として何が大事か、人として心得なければならぬ事がある。これは子として親を重んずるとか、國民として國を重んずるとか、朋友同士相信するとか、いろ／＼な人間としての道があります。この人間の道を先づ考へなければならぬ。これが考へられないやうな者は、佛敎も儒敎も何もあつたものではない、滅茶々々です。そこから議論が始まりました。殊に人間として人間の道を重んずるといふことを考へなければならぬ。その人間の道を重んずるといふ考が附けば、その人間の道は説いたものが幾つあるかといふことに気が付く筈です。その人間の道を説くには、孔子の敎や、或は印度の婆羅門の敎や、佛敎、斯ういふものがある

といふやうな順に議論が進んで参るのであります。それで一番初めにその人間の道のことを申してあります。

夫一切衆生の尊敬すべき者三あり。所

謂主・師・親これなり。

人間が世の中に生きて居るといふことは、銘々勝手次第に生きて居ることではない。お互に扶け合つて恵み合つて、教へ合つて生きて居る。さうするこそ皆が生きて居るのには、秩序がなければならぬ、統一がなければならぬ。亂雑な生活をして居つてはならぬから……。そこでその統一あり秩序ある生活を

主 従
師 弟
親 子

この關係を離れては何も順序ある生活は出来ない

値が無いといふことではないので、戦をしても大將が一人で戦は出来はしませぬ。兵隊が動いて呉れなくては戦は勝てない。商賣にしても主人が一人で商賣は出来はしない。若い人もあり小僧さんもあつて商賣が出来るのですから、下の人もそれらの價値は有るのでありますけれども、併ながら命令する命令される、治める、治められるといふこの秩序統一がなければ、何人の努力も意味を成さない、價値を有たないのであります。そこを主従の關係といふことで言つてある。何でも上の人が威張つて、下の人は小さくなれといふことではない、そこは誤解の無いやうにありたい。世の中の事といふものは順序が立たなければうまく行くものではありませぬからそこで命令する人も必要であるし、命令を受ける人も必要であるし、使ふ人も必要であり、使はれる人も必要である。さうしてこのお互の努力が相俟つて人生の事はうまく行くのでありますから、それ等の

いふことを言はれるのであります。「尊敬すべき者三あり」と申しますのは、主なる點を擧げたのでありまして、モウ少し根本的に言へば、主従、師弟、親子であります。この關係無しには世の中といふものは決して健全に参りませぬ。「主従」といふのは命令する人と命令される人、使ふ人と使はれる人、斯ういふ關係の残らずを主従といふ語で言ひ表はして居る。必しも昔のお大名と家臣といふやうなものばかりを言ふのではありませぬ。例へば役所で言へば長官と屬官といふやうなものでも、長官が命令して屬官がその命令に従つてやることなれば、一種の主従の關係になつて来る。軍隊でも大將が命令すれば、兵隊がその命令に依つて動くといふことであれば、やはり主従の關係になる。要するに治める者と治められる者、命令する者と命令される者といふやうな一切の關係を、主従といふ語で言ひ表はして居るのであります。無論それは下の者がまるで價

一切を「主従」といふ語で言ひ表はしてあるのであります。

我國では明治の初めから西洋の思想が入つて来て「何でも平等だ」と言つて、「上だの下だのそんな區別を立てるのはつまらぬ」といふやうなことが大分言はれて居るやうですが、私數年前に外國を歩いて見て實に意外に感じたのですが、英吉利へ行つて見ても、獨逸へ行つて見ても、佛蘭西へ行つて見ても、日本のやうに使ふ人と使はれる人の間の亂れて居る國といふものは殆ど無いと思ふのです。實際言へば我國はあまり甚しくなつたのではないか。あまり昔に封建制度で、殿様は馬鹿殿様でも威張つて、家臣達が酷い目に遭つたといふやうな事があつたその反動でありませうか、明治以後になつては何でも平等だといふことで、殆ど秩序が立たなくなつて居りますが、獨逸や佛蘭西や英吉利へ行つて見ても、決してさういふ事は無いのです。上の人は

上の人の地位を保つて居る、下の人は下の人で服従して居る。店へ行つて見ても店の番頭さんが小僧さんを呼捨てにしない店は無い、獨逸でも佛蘭西でも英吉利でもさうです。番頭は小僧を必ず呼捨てにする。「何々さん」だの、「何々君」など、言ひはしませぬ。「ジョン」とか「ゼームス」とか「ジョウジ」とか言つて呼んで居る。それでなければ命令といふものは行はれるものではない。これはナニモ小僧さんを馬鹿にするのではない。一つの事を運ぶ上に於て、命令に力がなければ事といふものは運ぶものではない。だから決して馬鹿にするのではないが、番頭さんは小僧さんを呼捨てにする、小僧さんも「ハイハイ」と言つて皆やつて居る。日本へ歸つて見るとそれが少しも行はれない。「小役員君」ナンと言つて居る。何處の國でもそんなことはありはしない。實際變な事です。ナニモそれは呼捨てにしたからと言つて、人間の價値が下る譯でもなければ、侮辱さ

い。日本では先生が動もすると生徒の御機嫌を取るといふやうになつて居りますが、こんなことでは仕様が無い。私は外國から歸つて中央大學で御馳走になつて、何でも感想を話せと言ふから、一番初めにそれを言つた、「さういふ事を廢めなければいけない、先生が生徒の御機嫌を取つて、何々君ナンとお世辭を言つて居るやうなことで教育は到底行はれない、折角御馳走になつたけれども、そんな事なら今日から辭めます」と言つたのですが、實際我國はあまり反動的に順序が立たなくなつた。チョット斯ういふ事はお若い方の氣に入らぬだらうけれども、實際世の中を堅實に運ぶ上に於ては、使ふ人と使はれる人、命令する人と命令される人、この間の權限がしつかりと立たなければ、仕事といふものはうまく行くものではない。これは何處へ行つてもさうであります。又命令されるとき使はれるといふことは決して恥かしい事でも何でもない。さうして命令に

れる譯でもないのであつて、事を運ぶのには命令する者と命令される者となければ出来るものではない。使ふ人と使はれる人との區別はしつかり立たなければ、決して事は嚴重に行はれるものではない。斯ういふやうな事も私は餘程考へなければいけないと思ふ。

それから學校でも、私は中央大學といふ所に行つて居りますが、外國から歸つて早速學校で言つたのです。日本の大學のやうにこんな亂暴な所はありません。西洋の大學へ行つて見ると、こんな事はありません。先生が生徒を「何々君」ナンと言ふ所はありはしない。先生は生徒に對して呼捨てにして居る。これは當然の話である。教へる人と習ふ人である。ナニモ先生が威張るのではない。道を教へるのだから、その道を重んずる爲には、教へる人は教へる人だけの格を保つといふことは當然のことである。それでなければ道といふものは傳はりはしない。

依つて自分の仕事を忠實にやるといふことが、それが人間として尊い事ナンでありますから、この「主従」所謂使ふ人と使はれる人といふ區別はチャンと立て、宜いことです。それから「師弟」これは謂ふまでもなく教へる人と教へられる人、この區別といふものは無論立てなければいかぬ。教へる人だつて、必しも間違ひがないとは言へませぬ。現に私などは人を教へて居りますけれども、凡夫でありますからいろ／＼な間違ひもあります。けれども教へる人としては、自分に間違ひのないやうに慎まなければならぬことは勿論ですが、習ふ人としては、設ひ完全でなくても、自分より年も多い、自分より経験も積んで居る人ならば、その人の教を謹んで聴くといふだけの態度を有たなければ、教といふものは心に入らぬものではな。だから「師殿にして道尊し」と言ひます。師といふものを敬はなければ道といふものは決して行は

れて行くものではない。

「親子」は勿論のことでありまして、親となり子となるといふことは、この世だけの縁ではないのでありますから、親は子を慈しまなければならず、又子は親を敬はなければならぬといふことは勿論のことであります。

ところで今「主・師・親」といふ三つを別々に申しましたが、モウ少し立入つて考へると、主は師と親との性質を併せて有つて居なければ本當の主ではない。師は又主たり親たる心得を有たなければ本當の師ではない。親は又主たり師たる心懸けを有たなければ本當の親ではない。斯ういふことを考へなければいけない。そこまで考へないとうまく行かないのです。人の上に立つ人は、たゞ人の上に立つて権力を以て他の者を命令するといふだけではない。どうぞ自分は總ての者の師として仰がれる模範的の行ひをしたい。斯う思はなければいかぬ。又人

は三つでありますけれども、結局一つでありましてその三つの徳を自分に具へて居なければ、主たることも出来ず、師たることも出来ず、親としての責任も完うすることは出来ない。斯ういふやうに考へられるのであります。

それから従たり弟子たり子たる者の方でもさうです。人に使はれる人は、たゞ月給を貰つて使はれるとか命令を受けて使はれるといふだけでなしに、やはり上の人の弟子になつたつもりで、上の人を手本としてこれを學ばう、弟子といふ心持を有つ。又上の人を親と仰いで、自分は子供のつもりになる。斯ういふことでなければいけない。使はれる人と同時に、弟子たり子供たる考を有つ。それから教育を受ける弟子は、又自分の先生を、子が親を仰ぐやうな心持で仰ぎ見なければいけない、又使はれる人が使ふ人に對するやうな敬虔な、眞面目な心持を有つてこれを尊敬しなければならぬ。子供はたゞ親を崇

の親となつて子供を可愛がるやうに、自分の部下を可愛がるやうにしたい。斯ういふので、主たる者は師と親との兩方を兼るつもりでなければ、なかく人の上に立つといふことは出来るものではない。これは餘程大事なことです。それから又師となつて、人の先生となつたならば、たゞ物を教へて居るだけでは濟みませぬ。親が子を可愛がるやうに、慈悲心をもつて自分の弟子を教へなければならぬ。又主たる者が自分の下を率ゆるやうなしつかりした威嚴を有つて人に望まなければならぬ。だからこれは師であると同時に、親を兼ね又主を兼ねといふことでなければならぬ。又親もその通り、たゞ親だと言つて家の内だけの事を考へてはいけません。子供の先生として仰がれるだけの行ひをしなければいけない。又子供の主として尊ばれるだけのしつかりした所がなければいけない。親は親であると同時に、師であり主である。さういふ考で、主師親といふの

めるだけではいけない。弟子が先生に仕へるやうな心持で親に仕へなければならぬ、使はれる人が使ふ人を尊敬するやうな心持を以て、親を尊敬しなければならぬ。それは同じことです。従たる者は弟子、子の心持を有ち、弟子たる者は従と子の心持を有ち子たる者は従と弟子の心持を有つ。皆さうです。お互に上の人も下の人も、主従、師弟、親子と分れて居りますけれども、これはモウ通じて一つのものですから、皆他の二つの徳を兼ね具へるといふ心持であります。初めて人の上に立てますし、又先生として人を導いて行くことも出来、親として子供を教へて行くことも出来る譯です。又下の使はれる人、弟子、子供といふやうなものもさういふ心持を有たなければならぬ譯であります。

この事は前に法華經のお話を申上げる時にも簡単に申したと思ひますけれども、今こゝに開目鈔の一番首めに「主・師・親これなり」といふことがあり

ますから、これに就ての大體の心懸けを申上げたのであります。斯ういふやうに人間が秩序を保ち、統一を保ち、出鱈目でない生活をするといふことになりますと、何と言つても教といふものが大事である。人間は皆悪い者ではない、けれども皆聖人賢人でもない。自分の心の中を調べて見ると、迷ひもありませんし、又覺り得るやうな本性もあるのであります。その覺り得るやうな本性が光を發すれば迷ひが勢力を失ひますし、迷ひが蔓つて來れば覺れなくなるのでありますから、その迷ひを除いて覺りを開くといふ爲には、物を習はなければならぬ。自分達よりは智慧も有り徳も有る人の、自分達に遺して呉れた教といふものを學ばなければならぬ。そこで

又習學すべき物三あり。所謂儒・外・

内これなり。

斯ういふことになる。今の人間の道を完うする爲

を讀んで理窟が解つたら、それで覺るといふものではありませぬ。繰返し／＼考へ、繰返し／＼習つて、さうして昨日よりは今日、今日よりは明日と、幾らかづ／＼進歩して行く、手数を掛けなければ決して本當の事は出来はしませぬ。ですからこの習學といふ「習」の字が非常に大事であります。

我國では明治の維新以後になりますと、この習の字が缺けて居る。私は今の學校教育に於て一番いけないのはこれだと思ふ。「習」が缺けて居る。いろいろな事を詰め込む。新しくズン／＼教へるけれども、先の事はモウ片附けてしまつて、少しも繰返して考へるとか、繰返して學ぶといふことが無いからいろ／＼な事を習つて居るけれども、結局どれも自分のものにならない、それではいけない。繰返さなければいけない。殊に宗教の事などはさうです。法華經を一度讀んだら解つたとか、維摩經を一度讀んだら解つたといふやうなものではない。繰返し繰

には平生から習ふべきものが三つある。それは「儒・外・内」と言つて、孔子の教と、外道といふ印度の佛法以外の教と、内といふのは佛法のことです。即ち孔子の教と、印度の婆羅門の教と、それからお釋迦様の教、この三つのものが人間の道としては一番大事なものであるといふのであります。

そこで習字するといふこの「習」の字が大事です。習といふのは繰返し習ふことです。たゞ一通り解つたら宜いといふものではない。この習といふ字は、雛鳥が飛ぶ稽古をするといふ字です。あの雀でも燕でもさうですが、雛が巢に生れてだん／＼大きくなると、巢の外へ出て一尺か二尺飛び上つては直ぐ下りて來る。暫く経つと二尺か三尺飛び上つては又下りて來る。幾度も飛び上つたり飛び下りたりして、だん／＼習つて、結局親と同じやうに飛べるやうになる。その飛び上り飛び下りる事を習と申します。吾々もこれをやらないといけないのです。一通り本

返し讀むたびに、前に讀んだ時はまだ本當ではなかつた、前に解つたと思つたのはまだ本當に解らなかつたといふことに本當に思ひ當つて參ります。少しづつ／＼深入りするのです。ですからどうしても習學しなければならぬ。繰返し／＼學ばなければいかぬ。その繰返し／＼學んで自分のものにするといふのに一體人間の教が幾つあるかと言へば、それは儒・外・内、孔子の教の儒教と、印度の佛教以前に行はれて居る外道、即ち婆羅門の教、それから内といふ佛の教とがある。

儒家には三皇・五帝・三王、此等を天尊

と號す。諸臣の頭身萬民の橋梁なり。

儒家といふのは孔子の教であります。孔子の教では三皇、五帝、三王といふやうなものを昔から考へる。この一々の名前などは別に必要がありません。三代

大層勝れた王様があつた。それから「五帝」と言つて、即ち五人の勝れた天子様が、あつてそれから「三王」今度は三代王様が續いたと申します。この「皇」とか「帝」とか「王」とかいふ字は、後になつて見るとなんだか、區別がつくやうで王の方が少し格が悪くして、皇とか帝とかいふ方がチト價値が上のやうに思はれるけれども、決してさうではないので、皇といふのは「おほいなり」といふ字です。帝も同じことで「おほいなり」といふ字です。それから王の字は「さかんなり」といふ字です。ですから初めは皇とか帝とか王とかいふ字に區別はありません。非常に大きな徳を具へて居る人、或は大變旺んな徳を具へて居る人。これを皇と言ひ、帝と言ひ、王と言つたのでありまして、これに何の上下の區別は無かつたのです。後になると、なんだか皇帝の方が王より上だといふ氣がしますけれども、昔はさういふ事はありません。それで三皇、五帝、三

といふのは人間の起りであつて、總ての物の本であります。天が人間を監督し、人間を護り、人間を治めて行くといふやうに考へたのです。ところが天といふものは形の無いものでありますから、そこで天に代つて人間を治め、人間を教へて行く者、それが聖人です。聖人は天に代るものです。この聖人が皇とか帝とか王とか、つまり國の元首になつて國を治める。だから支那の昔の思想で言へば、王様といふものは同時に教育者である。たゞ政治を執るだけではない、人民を皆教へ導いて行く職務を有つて居る譯です。これを皇とも言ひ、帝とも言ひ、王とも言ひます。だからそれを「天子」とも言ひます。天子といふのは天の代表者といふ意味であります。今でも日本では天子様といふことを言つて居ります。が、天子は天の代表者である。天といふものは無限のもの、形の無いものですから、天の代表者、天の代りに人民を治める者、これを天子と言ふ。それが

王と言ひましたところが、別にその價値に上下があるのではないので、さういふやうな勝れた王様が出て、さういふ人が國を治め、又人民を慈んで人民を教へて行きました。ですからこれを「天尊」非常に勝れた人であると申しまして、大勢の家臣が皆これに従ひ、又人民達もこれに歸依して居つた。

三皇以前は父を知らず、人皆禽獸に同ず。五帝以後は父母を辨へて孝をいたす。

三皇といふズツと昔の勝れた王様の出ない前には、親の恩といふものは知らない、人間は皆禽獸と同じであつた。それから三皇に次いで五帝といふものが出来まして、五帝以後は父母を敬うて、親に對して孝を盡すといふやうなことをだん／＼やつて来た。支那の昔は「天」といふものを認めまして、天が萬物を生じたといふやうに考へたのであります。天

聖人であつて、それが王であり、それが皇でも帝でもある。斯ういふ大體の考なのであります。それで「王道」王の道といふものは、つまり王様が天に代つて人民を治め、又人民を教へ導いて行くのだといふことになつて居ります。これが支那の儒教の根本であります。それでありますから善い王様が出て善い政治をし、又人民を教化することに依つて、人民は人間の道を知りまして、親を敬うて孝を致すといふやうなこともだん／＼出来て来たといふのであります。

何と言つても人間が自分を捨てるといふことは、親子の間から始まるのです。一番最初に人間が自己を捨てるといふ心持は何處で起るかと言へば親子です。幼い子供が親になつき、親が幼い子供を可愛がる。こゝで初めて小さい自己を捨てるといふことを實現するのであります。大きくなれば天下國家の爲ナンと言ひますけれども、根本は親子の情愛です。子供が

笑つて居る時には親は一緒に喜び、親が可愛がつて膝の上に抱き上げる時には、子供が嬉しがつて膝の上に攀上つて行くといふ、そこが本當の根本であつて、これが人間の自己を捨てるといふ初めナンデす。この親子の情愛といふものがなければ人間の道といふものは立つものではない。だから孝が本である。親子の情愛が本である。親子の間の情愛といふものを押し及ぼして天下國家にも及ぼし、一切の人にも及ぼさうといふことが人間の道の土臺であります。そこで聖人といふものが出来まして人間の道を説いて、さうしてお互に孝といふことを教へるやうになつたといふのであります。

所謂重華はかたくなはしき父をうやまひ、沛公は帝となつて大公を拜す、武王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形をきざめり。此等は孝の手本なり。

は皆虐政に苦しんで居つた。それで武王の父親の西伯、即ち後に文王と諡された人は、この殷の紂王といふ暴虐の王様に仕へて、生涯いろ／＼苦心をして死んでしまつた。そこでその息子の武王といふ人が親の位牌を車に載せて、決して自分達が國の政治を執つて自分の地位を得たいと思ふのではないけれども、あまりに殷の紂王といふ王様が無道であつて、人民が虐政に耐へられないから、人民を救ふ爲に、それも自分がやるのではない、親の西伯即ち文王の志を繼いでやるのだといふので、兵を起して殷の紂王を亡ぼし、天下を取つて國を立派に治めた。斯ういふことが西伯を木像に造るといふことであります。

それから「丁蘭」といふ人は、これは漢の時代の人で、漢の國の河内郡といふ地方の人でありますが十五歳で母を喪つて、洵に母の恩に感激して、母を忘れることが出来ないものですから、母の姿を木像

「重華」といふのは支那の舜といふ天子であります。が、この舜といふ天子はかたくな、洵に理窟の解らない、物の道理をまるで辨へないやうな父親であつたけれども、その父親を敬つて、生涯の間の親の言ふことに背かなかつたと傳へられて居ります。

それから「沛公」といふのは後に漢の高祖と言はれた人でありましたが、初め沛といふ所から兵を起して、後に秦の始皇帝を亡ぼして天下を取つた人でありました。この沛公は帝となつて、自分の父親を大公といふ名を付けて尊敬した。自分の父親は極く身分の低いつまらない人であつたのであります。漢の高祖が自分が天子になつたものですから、自分の父親に大公といふ尊稱を奉つてこれを大變に尊敬を致した。

それから周の「武王」といふ人は、自分の父親の西伯、これは文王と言はれた人でありましたが、その時分に殷の紂王といふ人が甚だ無道で、天下の人民

に對んで生涯これを禮拜したといふことがある。そこでこの丁蘭の細君が、初めはその母の木像を粗末にしたけれども、夫の孝心の篤いのに感じて、後には自分もその意を承けて、共にこの母の木像を大事にしたといふやうな話があるのであります。さういふやうないろいろな事實がある、これ等は孝といふことの手本であるだらう。

比干は殷の世のほろぶべきを見て、しひて帝をいさめ頭をはねらる。公胤といひし者は懿公の肝をとつて我腹をさき肝を入れて死す。此等は忠の手本なり。

今度は忠といふことの手本も随分ある。「比干」といふのはこれは殷の紂王の家臣であります。紂王があまり暴虐を極めた時に、比干は自分の主人を諫めて、どうもさういふ亂暴な政治をして居つたのでは人民が苦しむばかりでなく、國も必ず亡ぶだらうと

言つて諫めさせたけれども、紂王が肯きませぬで、
到頭比干を殺したのであります。比干は殺されるま
で諫言を入れて國に殉じました。

それから「公胤」といふ人は、これは周の末の時
代に天下が戦國の世になりましたして國が亂れて參つた
際に、衛の國の懿王といふ王様の家臣でありまし
た。自分が主人の命を受けて他の國に使に行つて居
りました留守中に、外國の者が攻めて來て到頭國が
亡びてしまつた。それは北狄と言ひまして、北の方
の野蠻人が自分の國を攻めて參りまして國が亡び
た。それで懿王といふ御主人は、王様の御殿の外に
引出されて其處で殺された。殆ど鬻り殺しに遭つて
腹を切つたと見えて、腸が路傍に出て居つたとい
ふ。其處へこの公胤といふ者が歸つて來て、自分の
主人が見る影もなき妾になつて殺されて居るのを見
て、心から悲しんで、國が亡び、主人が恥を受けた
時に、家臣たる者が生きては居られないと言つて、

いふ人の師である、「老子」は孔子の師である。斯
ういふやうな人を四聖、四人のすぐれた人と言つて
居つて、天上界の神様もこれを敬ひ、萬民も皆掌
を合せて拜んだ。斯ういふやうな風で、支那でも昔
から教といふものが大變に大事なものにされて、道
を學ぶといふことが一番大事であるといふことにな
つて居る。そこでその教を學ぶに就いていろいろの書
物があるといふことを次に言はれるのであります。

此等の聖人に三墳・五典・三史等の三
千餘卷の書あり。

「三墳」といふのは前に三皇五帝とありましたその
三皇の世の事を書き記したものを三墳と言ふ。「五
典」といふのは、五帝といふ五つの帝の世の治績を
掲げましたものを五典と言ふのであります。これは
今は全部は傳つて居りませぬ。一部分亡びてをりま
すが、兎に角舊い言傳へに依れば、三皇の世、五

六二
天地に哭して、御主人の肝を路傍に暴して置くに忍
びないと言つて、自分の腹の内に懿公といふ御主人
の肝を入れて、その儘命が絶えたといふ言傳へがあ
るのであります。これ等は忠の手本である。支那の
國に於ても忠とか孝とかいふやうな事は昔から申
す。これは人間の行ひとしては一番大事なものとし
てあります。

尹壽は堯王の師、務成は舜王の師、太
公望は文王の師、老子は孔子の師なり。
此等を四聖と號す。天尊頭をかたふけ
萬民掌をあわす。

それから又王様の先生となつた人も多くて、「尹壽」
といふ人は堯といふ勝れた王様の先生である、「務
成」といふ人は舜王といふ勝れた王様の師として仰
がれた人である。「太公望」といふ人は周の文王と

帝の世の王様の天下を治めた尊い行ひを書き記した
ものであります。それから「三史」、これは殊に模範
的の歴史が三つあります。司馬遷といふ人の書いた
「史記」といふもの、それから「前漢書」「後漢書」
と言ひまして、漢といふ時代が前と後とに別れて居
ります。その前漢と後漢の榮えた状態を書いたもの
があります。これは必しも歴史として模範的のもの
ではありません。これは日連上人の當時に於ては
史記と前漢書、後漢書といふものが模範的な歴史と
なつて居つたから、それを擧げられたのでありま
す。

其の所詮は三玄をいいます。三玄とは、
一には有の玄、周公等此を立つ。二に
は無の玄、老子等。三には亦有亦無等、
莊子が玄これなり。玄とは黒なり、父
母未生已前をだづぬれば、或は元氣よ

り生り、或は貴賤・苦樂・是非・得失等は皆自然等云々。

支那の儒教といふものに於ても教といふものが非常に大事なものになつて居るのだが、その教の大體は三つの「玄」である。玄といふのは奥深いといふこと、三つの奥深いところの教以外に出ない。その一つは儒教で教へることで、「有の玄」、周公・孔子といふやうな人の教へたものである。有といふのは儒教の教で言ひますと天といふことを本にする「道の本源天に出づ」と申しまして、天といふものを儒教に於ては立てる。この天といふことは、人間でも總てのものでも、凡そ世の中に有る物は皆この天の力の現れたものだとか考へるのでありますが、この天といふことに就て、孔子と孔子以前とは餘程趣きが違ふのです。

これは支那の話だけでなく、お互が信仰を決定す

が降り露が下りして、天の力に依つて草も伸びれば木も伸びる、花も咲けば實もなる、人間も生きて行き、禽や獸も皆生きて行く。これは天の力が現れて物を生かして行くのだ、物を化するといふのは變へて行く、だん／＼進歩して行く、これが天の道だ。だからその天の道を手本として人間の道を立てなければならぬ。人間も總ての物を生かして總ての物を繁昌さして、總ての物を發育さして行くやうに努めるといふことが、それが天の道を手本として行く自分の行ひである。斯ういふのでその天の道を手本として行く行ひの根本を孔子は「仁」と言つたのであります。

仁といふのは根本を言へばつまり物を生かすことです。吾々は物を生かさなければいかぬ、自分の努力に依つて、他のものゝ命を生かして行く、他のものゝ幸福を増して行く、他の人の生活を良くしてやるといふやうに、物を生かす力、これを仁と言ふ。

る上に於ても大事な問題だと思ひますから、簡單にこの事を申し上げますが、孔子より以前に於ては、「天」といふのは上から人間を見下して居るやうな心持です。これは詩經とか書經とかいふ書物を見ると皆さう書いてあります。天が上で見て居る、善い事をすれば天から福が與へられる、悪い事をすれば天から罰が與へられる。斯ういふのです。ですから罰を恐れる。又天の福を望むやうな心持から自分の行ひを慎しむといふのが、孔子以前の天といふものの大體の考へ方です。

ところが孔子はそれよりモット進んで居る、天といふのは人間の根本だと考へる。天の道、天道といふものが人間の道の手本だ。斯ういふやうに孔子は考へて居るのであります。天の道といふのはどういふのかと言へば、これは物を生かす力である。「生生化々」と言ひまして、物をだん／＼生み出して行く、春夏秋冬の氣候があり、晝があり夜があり、雨

物を生かす力といふのは天の道を手本として人間がこれに倣つて行くのだといふ、これが儒教といふものゝ根本であります。だからその仁といふものは何と言つても一番重大なことになる。その仁といふものを、ただそれだけでは詳しく解らないからこれを分けまして「忠恕」と言つて居ります。



仁といふことの説明は、忠恕といふ説明が一番宜しい。これは孔子の弟子の曾子といふ人が「夫子の道は忠恕のみ」と言つて、忠恕といふ語で仁といふことを説明して居る。これが一番宜しい。忠といふのは自分に與へられた事に全力を注ぐことです。それから恕といふのは他の人の立場に身を置いて察してやることです。忠と恕と出来れば人生はモウ皆うま／＼行く。自分のすべき事は本當に力を打込んでやる

さうして又他の人の立場に身を置いて他の人を察してやるのです。自分が老人であつたら若い人の事を察してやる。自分が若かつたら老人の事を察してやる。親となつたら子供の事を察してやる、子となつたら親の事を察する、使ふ人は使はれる人の事を思ひやる、使はれる人は使ふ人の苦心を思ひやる。さうして自分のする事に全力を注いで、さうして相手の人の立場を考へてこれを思ひやつてやる。忠と怒と揃へば、それが仁になる。その仁といふものは天の道に合ふ行ひだ。斯ういふのであります。

これが儒教の根本です。儒教といふものを詳しく言へば際限のないことでありますが、一口に言へば斯ういふことです。天の道を本にして仁を行ふ。この仁といふのは忠と恕でやつて行かう。自分に與へられた事にはどんな事でも全力を注いでやる。さうして他の人の立場に身を置いて始終これを察して行く。斯ういふことであればこの世の中が洵にうまく

てしまつて、モウ自分の利益とか、自分の損得とかそんな事を一切捨て、やらなければいかぬといふのが老子の教の大體であります。ですから「聖人は無爲の事に處る」と申します。無爲といふのは自分の利害損得を捨て、しまふ。自分が儲かるとか儲からないとか、損をするとか得をするとか、そんな事を考へて居つた日には世の中といふものは決して善くならないから、無爲の事、自分といふものを全く離れた行ひをやるといふことが、それが聖人のすることです。聖人は一切の人間の手下であります。一切は人間の又聖人を範としまして、さうして所謂無爲の事、自分を離れた行ひ、私利私慾を捨てた行ひをしなければならぬ。斯ういふのが老子の教でありますから、これは無と言つて、一切の執著を離れ、一切の私情に執はれる心持を捨てなければならぬといふことを主にして老子が教へるのであります。これが無といふことであります。

行くのであります。そこで天の道が人生に實現されて行くのでこれを「有」と言ふ。有といふのは現實の意味で、現實の世の中に役に立つところの深い教であります。これは周公といふ人がさういふ教を立てまして、孔子が更にこれを大成したものであるといふのであります。

それから第二は「無の玄」無といふことを本にする、これは老子が立てたものである。老子は自然といふことを言ふのです。人間が彼此考へても仕様がなない、自然にある、自然から道が出来て、その道から人間のいろいろな教が出来て来る。斯ういふ考へです。自然といふものが本で、自然といふのは人間が考へたつてどうもならぬ。自らあるのだ。この自然がある自然といふものから道が生れて、その道が本になつて人間の教が生れる。

自然——道——教

だから人間は自分の私を捨て、自分の我儘を捨て

それから第三には「亦有亦無」と言つて、有でも無でもどつちにも執はれないやうな教、これが莊子といふ人の教であります。莊子といふ人は面白い人であります。一體一つの主義だの主張だの言つて、そんな事を彼此れ言ふのは間違ひだ、人間が理想を立てたり目的を立てたりするのはつまらないことなんだ、小さい人間が自分の考で彼此れきめたつて仕様がなない。天地の間の自然の道といふものは人間より大きいのだから、その大きい道に委して置いたら宜いぢやないか、善い悪いの、有だの無だのと言つて、そんな事は皆捨て、しまへ、斯う言ふのが莊子の教です。ですから莊子を讀んで見ますと人間の心が恐ろしく潤くなる。こんな事があります。泥鰌が泥の中で泳いで居る、これは大變面白さうだと思つて人間が泥土の中に入つて見ると、身體が冷えて腰が痛くなつた。だから泥の中は泥鰌に委して置いて、人間は地上に居た方が宜い。猿が樹の

枝から枝へ傳つて居る。これは面白さうだと思つて人間が樹の枝から枝を飛んで見ると、眼がまはつて仕様がな。だから樹の枝は猿に委せて置いて人間は地面に居た方が宜い。銘々適する所があるのだから、ナニ他を羨むにも及ばなければ、自分で得意になるにも及ばない。各々自然の成行に委せて、慾を起さないで安心して居たら宜いちやないか。斯ういふ事を言ふのであります。それが大體莊子の教であります。

面白い話がありました、許由といふ人の話が「莊子」の中にある、許由といふ人が或る山の中に引込んで一人で居ひすまして居つた。その時分に堯といふ天子があつて、これは大變な君名と言はれる偉い天子であります、その堯が許由の名前を聞いて、或る日許由を自分の御殿に呼んで言ふには「どうもあなたは非常に偉い方ですが、私は一向氣が付きませぬでした。あなたのやうなそんな偉い方を

「オイ、お前何だつてそんな所に居るのだ」許由が言ふには「マアどうか聽いて呉れ、今日は堯といふ馬鹿な奴が俺を呼んで王になれと言やがつた、氣持が悪くて仕様がな、耳が穢れたから今耳を洗つて居るのだ」と言つたら、その老人が「ア、さうか、俺の牛にその水を飲ませようと思つたのだが、そんな汚ない水を飲ませないで宜かつたナ」と言つて牛を挽いて立去つたといふ話がある。さういふのは要するに世の中に執はれるなどいふ教です。身分が高いとか低いとか、そんな事はどうでも宜いのだ、金が有るも無いもどつちでも宜い。自然に委して行きさへすれば宜い、自分の境遇に安んじて居れば宜いのだ。斯ういふことを教へたものです。これが莊子の教であります。大體支那の教といふものは、孔子のやうに、天を本にして仁を行へといふ教か、或は老子のやうに、道を本にして私を捨てるといふ教か、或は莊子の言ふやうに、そんな道だの教だのまるで

差措いて、私のやうな徳の無い者が王の位に即いて居るナンといふことは、洵に濟まないことと思ふ。今日限り私は王の位を退いて、あなたに王になつて貰つて、私はあなたの家臣になりたいと思ひます。何分宜しく願ひます」と言つた。さうすると許由がそれを聽いて「馬鹿なことを言ふな、王になるナンといふ者はお前くらゐの者で澤山だ、俺は王ナンといふくたらないものになる人間ぢやない」斯う言つて斷つて歸つて來た。それから山へ歸つて來てどうも氣持が悪くて堪らぬ、俺に王になれナンと馬鹿なことを言ふ。王などはあのくらゐの奴で澤山だ。自分分は王などになるやうなそんな下らないものでない。どうも下らない事を聽いて氣持が悪、耳が穢れたといふので、それから溪川に下りて溪川の水で耳を洗うて居つた。許由耳を洗ふといふ有名な話になつて居ります。さうしたら其處へ一人の老人が牛を挽いて通つた。許由の友達と見えて呼び掛けた、

かまはないで自然の儘に委して行くといふ教か、そのどれかである。これは支那に永い間行はれた教の三つの代表的なものをこゝに擧げたのであります。

「玄とは黒なり」玄といふのは黒いといふ意味で黒いといふのは奥深いといふ意味である。親が自分を産む以前から何かあつたらう、その本を索ねれば何か元氣といふやうなものがあつて、その元氣といふものが人間の體を成して、さうして人間がそこに生れたのだ。人間が生れる以上は、身分が高いとか低いとか、苦しいとか楽しいとか、善いとか悪いとか、損があつたとか得があつたとかといふやうなことが出來て來るのだけれども、それはマア自然に出來た事だから、そんな事に執はれないでも宜い。斯ういふのが莊子の教であります。

かくのごとく巧に立こいへども、いま

だ過去・未來を一分もしらず。玄也、黒也、幽也、かるがゆへに玄といふ。但現在計りしれるにたり。現在において仁義を制して身をまほり國を安んず。此に相違すれば、族をほろぼし家を亡す等いふ。

斯ういふやうな教を支那の孔子、老子、莊子といふやうな人は皆立て、居る。これは洵に巧みに立てただけけれども、併し要するにこの世だけの事を言つたので、これ等の人の教といふものは、過去の事を知らなければ未來の事も言つてない。たゞこの世の五十年か七十年の一生の事だけを言つて居るのであるから、深いと言つても知れたものである。「玄」といふのは黒いといふ意味、幽といふ意味、奥深いといふ意味、その説く所が非常に深いから玄と言ふの

此等の賢聖の人々は聖人なりといへども、過去をしらざること凡夫の背をみず、未來をかみざること盲人の前をみざるがごとし。但現在に家を治め孝をいたし、堅く五常を行すれば、傍輩もうやまい、名も國にきこえ、賢王もこれを召て或は臣となし、或は師とたのみ、或は位をゆづり、天も來て守りつかふ。所謂周の武王には五老きたりつかへ、後漢の光武には二十八宿來て二十八將となりし此なり。

であるからその人々のことを聖人ナンと言つて居るけれども、過去の事は知らない、ちやうど凡夫が自

のだけれども、併し幾ら深いと言つたところが、現在の世だけを知つて、過去の事も未來の事も知らないのだから、深いと言つたところが、佛教などに比べればそんなに深いものではない。たゞ現在に於ては仁とか義といふものを立て、さうして自分の身を守り國を安んじて行くから、それでその聖人とか賢人とかいふ人を立てた教に背かなければ、世の中もだん／＼善くなり、現在の世の中に於ては人間の道をチャンと立て、自分の身を守つて國も安んじて行く。斯ういふことになる。であるからそれが立ちさへすれば國も安かになり、隨て町も善くなり、村も善くなり、一家一族といふものも善くなる。又それに背けば家も滅び國も亡び一家一族も繁昌しないやうになつて行く。要するに孔子、老子、莊子、ナンといふものは、人間の一生涯五十年か七十年の命を健全にし、障りの無いやうにして行くといふ爲の教であるかと思はれる。

分の背中が見えないと同じである。過去の事は見えない。又未來の事もそれ等の人は一向知らない、ちやうど盲者が自分の眼の前の所を見ないと同じである。たゞ現在の事だけは洵に能く言つて居るから、現在に於て家を治め、親に孝行をし、又廣く五常の道——五常といふのは親子、兄弟、君臣、夫婦、朋友でありますが、この五つの人間の道を能く立て、仲間の者も大に敬ひ、世の中はそれで一通りは無事になつて行き、又國も善くなる。さういふやうな道を世に傳へる人があるならば、國の王様が勝れて居る王様であれば、賢王もこれを召して或は臣となし、或は師としてこれを敬ひ、或は又さういふやうに勝れた人があれば、自分の位を譲るといふやうなこともあり、又天上界の者も來つてこれに仕へるといふやうなこともある。歴史に依れば周の武王といふ人には五人の大層年老つた徳の有る人が來つてこれに仕へたといふこともある。後漢の光武帝の時には二

十八人の勝れた家臣があつた。その二十八人といふものは、天に在るところの二十八の星が假に人の姿を現はして、光武帝を輔けて天下を平かにしたといふやうな言傳へもある。

而しかも、過去・未來を知らざれば、父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なり、まことの賢聖にあらず。孔子が、此の土に賢聖なし、西方に佛圖といふ者あり、此聖人なりといひて、外典を佛法の初門となせしこれなり。

さういふ譯で支那の教といふものは、洵に現在の世の中を治める上に於ては申分のない教のやうだけれども、過去の世、未來の世といふことを知らない

にも無い。それだから親が生きて居る間に悪い事をすれば、後の世は救はれない。子供がどうしようと言つても親を救ふことは出来ない。斯ういふことである。それでは本當に恩に報ゆるといふことにならないだらう。本當に親の恩に報ゆるといふことであるならば、若し親が生きて居る間に罪をつくつても遣つた子供の自分が善い事をして親の罪を償ふといふことになつて、そこで本當に恩に報ゆるのではないか。そこはとも孔子の教も、老子の教も、莊子の教も相當に善いものだけれども、まだまだ佛教に比べると淺いものになる。どうしてもこの人間の生命をこの世だけと考へない。親も先祖も、身は無くなつても心は生きて居るのであるから、その親なり先祖の恩に報ゆる爲に自分が善い行ひをして、自分の善い行ひをした報いを親に譲らう、先祖にも譲らう。斯う思ふことに依つて初めて本當の報恩といふものが出来る。

から、親の爲に力を盡すとか、友達ともだちの爲に力を盡すとか、師匠の恩に報ゆると言つたところが、この世だけのことで、後の世の事は言つてない。親がこの世に於て道に違つた事をしたのを、子供が信心をして親の後の世を助けようとか、御主人がこの世に於て非道な事をしたのを、家臣が信心して御主人の後世を助けようとか、さういふ事は儒教や道教では一向無い。この世だけのことである。佛教に於ては廻向といふ思想があつて、例へば私が佛の教を信じ、一生懸命に佛様を信じ、又佛様の教の世の中に弘まることに力を盡せば、私が大事と思ふ父でも母でも、祖父さんでも祖母さんでも、私の信心の力に依つて救はれる。その祖父さん祖母さんが歿歿ひ生きて居る間に信心して居なくても、生き残つた子孫である私が本當に信心すれば、私の大事と思ふその祖先は、私の力に依つて救はれる。斯ういふことが廻向といふことである。これは儒教には無い、老子の教

斯う考へて見ると、孔子の教も老子の教も莊子の教も結構だが、まだまだ恩に報ゆるといふ點に於ては、十分でないものがある。併し孔子の教や何かは、價值が無いとは言へない。その孔子の教などに依つて、兎に角道が大事だ、教が大事だといふことが解る。そこで道が大事だ、教が大事だといふことが解つたならば、そこへ佛教が入つて来て、さうしてこの世だけでない、前の世から後の世までに通じての教を弘めるといふことになる、そこで孔子の教に依つて訓練されたその訓練が無駄にならない。兎に角孔子でも老子でも莊子でも、人間として正しい事をしろ、道を守れといふことだけは教へて居る。それは有難い。その道といふものは何だといふ時に、孔子や老子や莊子で盡きないものを、今度は佛教で眞實のものを教へることになれば、佛教以外の教が準備の役に立つて、それから佛教の教が更に眞實の人間の道を知らせるやうになるだらう。

斯ういふので、決して日蓮上人は佛教以外のものを價値が無いとは仰しやらない。けれどもまだそれでは盡きないのだ。孔子の教を學ぶのも宜からう、老子の教を學ぶのも宜からう。これに依つて人間は道が大事だ、教が大事だといふことを辨へて、更に佛教に入つて、過去から現在から未來に亘つての永い生命を學んで、さうして親をも、知つた人をも助け、又自分も未來永遠に亘つて佛の境界に到達するやうな大きな修行をして行つたら宜からう。斯ういふことになるのであります。

(第二講了)

○○○○○
記
○○○○○

○○○○○
事
○○○○○

本部 團報

御會式 日蓮立正大師非滅減の第六百五十五年忌御法會の式をば、十月十日午後二時より、小西日喜師導師とし、本部講堂御寶前を莊嚴して有志相集つて虔修させて戴いた。

讀經に先達て宗歌を合唱し、それより方便壽量唱題後に御妙判御回向といふ順序であつた。袖の果實は色づかないにせよ、十月の聲に會式櫻も若干ホホ笑を見せて何となく涙を催すばかり。虚空にそれとなく高唱の響がするやうである、それは神力品に仰せられた 釋尊の別付囑の文四句の要法、

爾の時に佛、上行等の菩薩大家に告げたまはく、諸佛の神力は是の如く無量無邊不可思議なり、若し我れ是の神力を以て無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て、屬果の爲の故に、此の經の功德を説かんに猶盡すこと能はじ、要を以て之を言はゞ、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆この經に於て宣示顯説す。

所謂五重支の五字 妙法蓮華經である、南無釋迦牟尼佛 南

世間に二乗として滅度を得るあることなし、唯一佛乘をもつて滅度を得る耳。比丘當に知るべし、如來の方便は深く衆生の性に入れり其の小法を志樂し、深く五欲に著するを知つて、是等の爲の故に涅槃を説く。是の人若し聞かば則便信受す……。

汝が所得は滅に非らず、佛の一切智の爲に當に大精進を發すべし、汝一切智、十力等の佛法を證し、三十二相を具しなば、乃ち是れ眞實の滅ならん。

—妙法蓮華經卷第三—

無妙法蓮華經の大きな音聲が力強く唱へられて居る感がある。萬更錯覺でもなさうである、無論聞える聞えぬは人々の果法にも依るといへやう。兎に角自分を反省し、信念増進に一番意義深くこの十月を記念したい。

法要後 磯部理事は月始め一日に 立正大師勅額拜戴第五周年記念式典に延山に詣でた感想を續々述べられ、往年本多上人が天晴會員と共にその御草庵跡に足袋徒歩となつて拜跪された如く、志ある者は宜しく聖蹟に衷心から憧憬の情操を懐いて、其の芳躅を二陣三陣と繼かすば皆歸妙法も空文となつてしまふ。坊さんが妻子を不便とおもつて善財に向ひ、無道念を振廻して黨中黨あるやうでは、拳螺の壹機が落であるまいか、法滅盡の期を何と裁斷して往く歎……。

小林一郎先生は『法華經囑累』と題して、この囑するは何んな風に囑するか、それには「わすらひ」果の字の意義をよく味ふべきであると、法華經廣宣流布の難いことを詳説され日蓮立正大師の高風多難の生涯に於ける淨業を、富樫那の妙辯で敷演され満堂大きな感激に滿され、五時から學校へ出られるので已むなく時間を一時間ばかりで切り上げられたことを惜しまれた。

小西日喜師『常住此說法』の法話を致さるべき處、突發の法務が差し起つた爲め乍遺憾次回を期する事として、會を閉ぢ後座談に移り、各位へは本多上人の著書を記念に差上げた。

及び廿八に亙り或は托鉢修行、或は題目講、或は滿洲事變滿五周年戰病死者追悼法要を嚴修された。

福島、十月十六日午後三時より五時迄高等商業學校内の學生集合所に於て、日蓮聖人鑽仰會例會を開催し、磯部滿事氏に依つて法華經如來壽量品大意を聽聞し、同夜七時より大町中村家に於て座談會を開き、最初に先頃逝かれた金澤夫人の嚴父と佐々木氏夫人の追悼法味を捧げ、其後御會式の聖月に因むで日蓮聖人の偉業を詳説され、終つて質疑應答に華咲かせ閉會は十時過であつた。

横濱、法悦協會、十月中は四日神奈川西村家、九日磯子高橋家、十五日中區和田家、廿四日磯子稻葉家と夫れ々小西師又は磯部氏を中心として家庭講話が營まれ、各家族一同信念増進をはかられた。

同心會 實業家の重鎮大川平三郎氏の女房役として内助の效淺からざる池田新一氏が、社内青年各位の思想善導に志し、これは是非日蓮立正大師を通した法華經精神に基いて宗教信仰の妙味を社員一同に與へ、之を道義感情の源泉とし、止惡作善の實踐に移して日常感謝報恩の生活に入らしめ、無濁歡悅の社風を醸成して、先づ社内の雰圍氣をして一番模範的の

各地教信

二本松、蓮華寺中島師、九月十三、十七、十八、十九、廿七

開目鈔講座 毎水曜日晚六時三十分から勤行、七時から小林先生の御書開講は本部の講堂に於て續講されて居る。彌々佳境、各位奮つて御來聽の程自他の爲めに祈る。

ものにしやうとの一大淨願を立て、曩日皆お互は水魚の思をなして異體同心に行かうではないかと、其の會名も『同心會』と命名して、目下毎月二回以上相集まつて初めに修法、引續いて法話といふ順序に勵行されて居る。講師は本團教務部の田中、磯部の二氏が目下擔任され午後七時から十時迄であるが

求道熱に燃えた熱誠な青年達、その時間も忘れて十一時、十二時を過ぎることもあつて全く稀有の現象である。願くば藍の藍より出で、益々青きやうに、同心會の隆昌は獨り一會社の爲めでなく、國家の爲めであり、大にしては世界の爲めであることを深く心に藏して精進を祈つて止まぬ。

寄附金維持及團費誌料領收

(自八月二十一日 至十月二十一日)

一金貳圓貳拾錢也	千葉縣 風戸 三藏殿	一金拾圓也	東京 加藤重太郎殿	一金壹圓也	東京 小峰 豐子殿
一金貳圓也	兵庫縣 笹井 つた殿	一金貳拾壹錢也	大阪 松本 光廣殿	一金壹圓貳拾錢也	奈良縣 出口馬太郎殿
一金壹圓貳拾錢也	東京 木屋彌三郎殿	一金參拾圓也	福島 中村 美津殿	一金拾圓也	市川 立正 會殿
一金貳圓貳拾錢也	東京 本郷常次郎殿	一金貳圓五拾錢也	東京 高橋福一郎殿	一金貳拾圓也	東京 柴田 武治殿
一金壹圓貳拾錢也	福元縣 宮川 日見殿	一金貳圓五拾錢也	同 城谷 昌安殿	一金壹圓貳拾錢也	愛知縣 戸松 あさ殿
一金壹圓五拾錢也	札幌 田邊松二郎殿	一金貳圓貳拾錢也	山口縣 荒木 ツル殿	一金貳圓貳拾錢也	旭川 三谷 完市殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府 寺澤 信平殿	一金參圓也	盛岡 小林 茂雄殿	一金五圓也	東京 山田 英二殿
一金貳圓貳拾錢也	東京 安井 源吉殿	一金四圓四拾錢也	大阪 渡邊 登代殿	一金貳圓五拾錢也	同 須藤 仙吉殿
一金貳圓貳拾錢也	同 安井 米藏殿	一金貳圓也	東京 沼部彌太郎殿	一金貳圓參拾錢也	千葉縣 小島 沈明殿

念 告

從來本部に於ては、團員も單なる購讀者も同一金額を以て御清授相仰ぎ

居申候處、先般正團員と、誌友とを

區別すべき必要相通り申候に付、本

誌巻頭略則御諒承の上、可相成團員

として此際益御高授の程偏に御願申

上候 恐々

財團統一團

一金 貳圓也	千葉縣	中村正治郎殿	一金壹圓貳拾錢也	大阪	小關 三平殿
一金 參拾圓也	東京	井上道太郎殿	一金 五圓也	東京	鈴木うた子殿
一金 五圓也	山梨縣	原田 幸八殿	一金貳圓五拾錢也	福島	福田壽賀子殿
一金貳圓五拾錢也	東京	安江 清海殿	一金拾貳圓也	市川	富田 こと殿
一金 參圓也	同	寺澤 萬三殿	一金 四圓也	福岡	中村 ツネ殿
一金貳圓貳拾錢也	同	鈴鹿 直三殿	一金貳圓五拾錢也	福島	永井 節子殿
一金貳圓貳拾錢也	山形縣	長澤 博太殿	一金五拾壹圓四拾五錢也	＊ノルル	日比野日眞殿
一金貳圓五拾錢也	神奈川縣	田澤 留吉殿			
一金貳圓五拾錢也	大阪	鷺田 重正殿			
一金貳圓五拾錢也	同	森 千代殿			
一金 壹圓也	東京	小峰 豊子殿			
一金 參圓也	同	目黒駒太郎殿			
一金壹圓貳拾錢也	大阪	小田末治郎殿			
一金貳拾壹錢也	同	松本 光康殿			
一金貳圓五拾錢也	模 濱	日山典三郎殿			
一金 貳圓也	東京	沼部彌太郎殿			
一金貳圓五拾錢也	同	上田 晏弘殿			

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

編輯室より

五百美の記念に、各方面から御寄稿を戴いて感謝に堪へない。明治三十年來これが發行本圖係深い人々の中に既に故人となられたに多上人を始め、野口、國友、梶木上人等あり、現在では井村、笹川、今成、鈴木、山根、關田、三上、松尾等の諸上人御健在で活躍されて居る、但し獨り松尾上人は其手足御不自由で在せらるゝことがいかにも悼ましい。せめて夫等の方々から一片の御感想をお願い出来たらばと思つた。幸にも笹川、山根、成島、三上等の諸師より、その御多忙の中をば法の爲めの故に御寄稿を戴き感謝に堪へない。

佐藤中將が、アノお繁劇の日常にも拘らず本誌の爲めに卓説をお寄せ下されたことは寔に有難い。宗教家の悪い慣例で自分は出家であるから、世間のことは無關心であると、寧ろそれを誇りとするものが多い。釋尊が、時義論と世俗語を了達すべく教へられ、法華經が世法圓顯の特長を示されたのにも無頓着である坊さん達の三十棒であるまいか。勿論

本多現下の薰育を棄けた顯本の僧侶方には本論の要もあるまいから、御一覽の上は適當に他宗の者にお願ひ願ひたいと思ふ。

柴田先生が、統一團の理想目的を御理解下さつて、宗派觀念に捉はれず克く 日蓮の弟子として異體同心の實をお示しになり、その御繁用の中から特に御感想をお寄せ下さつた又本門法華の三吉上人からも御投稿下さる答であつたが、連続法務來客等の爲め遂に締切り迄に運びかゝると、盡々其朝御鄭重なお電話を戴いて却て恐縮した。

山田博士の奥様 即ち有名な江川坦庵公の令孫から戴いた玉稿には、あまりに自分のこととが讀め切つてあるので、實は躊躇したものの、他面自分に反省懺悔の心を養へよとの大きな教の伏在せることに心付き、有難く皆様の前に拜跪合掌する次第である。大八木先生の眞摯、高潔な御人格から溢れ出た和歌と、又金子法兄の道念篤き唐詩は其の情緒極めて深いものか偲ぶ。

増野先生の入信に就ては、かゝる機會に一

般佛教徒の熟讀を望んで止まぬ。而して、迄に引導されて來た小高先生のかくれた法動は實に尊い、或るものが 本多上人の教化は山吹の花のやうで、果實を結んでないと嘲笑して居るが、小高先生は最も 日生現下を慕ふ一人である。世間は廣い！ 大きな果實を獲得せんとするには、多くの年月を費すであらう、目前の小果如何を以て大人物の評は當らぬ、「下女の眼には賢人なした」 恥かしいことである。

控本堂に橋本道兄の不斷の研鑽、精進の熱誠は近づくもの、驚嘆する處である。誌上に躍如たるその情緒が纏綿として流るゝ様が身に沁みて有難い。青年の士女等特に御愛讀を望む。

巻頭 恩師の所感一節は、敢て四音のものと思へない。最近又復統合の聲が内外に叫び出されて來た。それを目的とする會が在家の側に依つて結成されて居るが、統一團が初期の通りに活躍せなかつた一現象として甚だ痛愧に堪へない。併し歴史は分裂を迫つてゐる。そこに 本多上人の御苦心も潜んで居やう、

兎に角志有る人々は御精進の上、法の爲め、國の爲め、人々の爲めに御濟援をお願ひ申上げらる。

口繪の寫眞は、其昔し阿山縣津山に於て修行中の聖應房、故郷姫路に淋しく待たるゝ悲母の御に依つて、鈴木同僚と俱に撮影されたもの、日蓮上人の御好意で復寫した。

萬載三寶の上宮憲法の文は、昭和五年其譯漢録を刊行せんと企てられた書籍の巻頭に飾るべく、特に御榮筆になつたもの、此種の絶筆である。



新案許 176867
特許 179231

クオン、カラー

詰襟用カラー（セルロイド芯入）

特長 衛生 三拍子揃ひ 特価拾銭 送料貳銭

衛生 夏は汗を吸取り冬は肌さばり爽やかにして皮膚をいたためず常に襟元の美が保たれます。
 經濟 本品は低廉にして永久型の崩れぬ製法にて従来のカラーと異なり洗濯屋へ出す費用と手数を省き御家庭で簡単に洗濯が出来ます。
 便利 時代の要求により生れたクオンカラーは洗濯簡易ですから二三本あれば一年中間に合ひます。

クオンカラー 山田商會 製造發賣元

東京市四谷區内藤町一番地
 電話四谷七七五番
 振替東京六二二番
 ◎洗濯の仕方、一時間位水又はぬるま湯に入れたカラーを板の上に置き、石鹼を付け、ブラシにてこすりシボラズ水ゆすぎして其まゝ乾して下さい、乾き次第直に御使用出来ませう。
 警視廳各學校御用、三越、三省堂 一 流洋品店にて發賣

本多日生上人著書特價提供

- | | | | |
|---------------|-----|----|--------|
| 聖語錄 | 改版 | 特價 | 金壹圓八拾錢 |
| 法華經要義 | 賜天寶 | 全 | 金貳圓五拾錢 |
| 日蓮主義心髓 | | 全 | 金壹圓五拾錢 |
| 日蓮主義精要 | | 全 | 金貳圓九拾錢 |
| 眞理の基礎に樹つ佛教の信仰 | | 全 | 金拾五錢 |
| 法華經要品 | | 全 | 金參圓廿五錢 |
| 日生上人レコード | | 全 | 金拾錢 |
| 本尊意識に就て | | 全 | 金貳拾錢 |
| 磯部滿亭遺稿 | | 全 | 金壹圓七拾錢 |
| 本多日生上人 | | 全 | 金拾錢 |
| 勸行作法 | | 全 | 金壹圓 |
| 河合勝明著 | | 全 | 金壹圓 |
| 皇道と日蓮主義 | | 全 | 金壹圓 |

月刊「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六丁目

「教」

發行所

振替口座東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六丁目一七
 財團法人 統一團出版部
 電話東京九四二〇番

統一團定價
 一冊 金貳拾錢 送料壹錢
 半々年 金壹圓貳拾錢 送料共
 一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
 ▲御申込ハ總テ前金ノ事
 ▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
 ▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
 通知ノ事

昭和十一年十月廿七日 印刷納本
 昭和十一年十一月一日 發行
 (第五百號)

不許複製
 東京市小石川區音羽町六丁目一七
 編輯人 磯部 滿 事
 發行人 磯部 滿 事
 東京市品川區南品川二ノ一八一
 印刷人 大辻松太郎
 東京市品川區南品川二ノ一八一
 印刷所 都印刷所
 電話葛輪三五九四号

發行所 財團法人統一團
 東京市小石川區音羽町六丁目一七
 電話牛込五三三六番
 振替東京九四二〇番

目 次

聖訓摘要……………	日生上人
日蓮宗概観(其六)……………	梶木顯正
佛教文學に現れたる人間性(中篇)……………	本田義英
清澄の山……………	磯部満吏
開目鈔講話(第三講)……………	小林一郎
記事……………	

○本部團報 ○各地教信 ○今成師遷化其他計

第四十一年十二月號

統

法財
入團
統

團
發
行